

## 四六

公二さんは泉子さんをつれて、何處とも知れぬ山の道を散歩して居りました。緑玉を溶かしたやうな新緑のいろが、心の臓まで泌み徹るほど頭上に左右からおつ冠さつてゐる。土の濕氣から立ちのぼる酔ふやうな香ひと静寂の境地、兄妹は夢のやうに手を引きつれて上つてゆくうち、公二さんは何だか突然一種の恐怖に襲はれました。それが前から來るのか後から來るのか、横から來るのかはわかりませんけれども……。

心の上部で不安の波が胸をおどくさせるのを強いて堪えて、ピクピクし乍ら進むと、恰ど崖の上から一本の醜い楓の樹が突き出てゐました。その幹にまきついた蛇が一匹鎌首をもたげて此方を見てゐるのでした。

公二さんははつと立ちすくみました。解つた、解つた。今までの恐怖の原因が！これが自分を惹きつけたのだ。皐月の野畑に獨り紅く咲く虞美人草の様に、遠くの方から自分を惹きつけたのが此奴だつたのだ、と思ひました。けれど妹を愕かせまい心づかひの爲に、だまつてたゞ泉子さんをかばふやうにして通り抜けました。

が、どうも氣になつて仕方がありません。黒い頭布を被つた傀儡師に繰つらるゝ人形の様に、公二さんの頭は後を向きました。居ない、蛇がゐなくなつた。何處へ行つたらう……急に高まる公二さんの鼓動は、胸の上ののせた手が弾かれるやうでした。いくらかの好奇心は突嗟に驚怖心と變つて、足がふるへた、身もすくみました。

はつと公二さんの心づいた時には、泉子さんは道傍に倒れてゐました。

その長い黒髪を地に曳いて！ 公二さんは馳け寄つて直覺的に胸に手をあて、みえました。

案にたがはず小鳩の様な呼吸の喘ぎは、もう刻々に微弱になりつゝあるではありませんか。たつた先刻までは並んで歩いてゐてもその若くすこやかな情熱の強さが耳に響いたほどだのに。

公二さんは男泣きに泣き出しました。泣きながら抱き起して懷をかきわけてみると、まあどうでせう!! 蛇はまだ眞白な胸の凸起に食ひついたまゝ自己を忘れ總てを忘れて、心持よい薫りを放つ戀に耽つてゐる。まるで戀人同士の様に!! 血を吸つてゐる。大理石彫刻の様な顔の色が若葉の蔭影ならぬ青みの度を増してくる。……あゝ何と云ふ神々しさ、ギリシア神話の女神を思ひ出させる。恰ど聖それ自身の様に!!

ついに泉子さんは公二さんに抱えられたまゝだんく息が絶てしまひました。公二さんはどうすることも出来ませんでした。けれどもまだその唇の鮮かさと顔色の美しさ、どうしてこれが死んだと思はれやう。公二さんは自分の腕に力のあらん限り、強く強くアンブラッソーしました。胸を胸に顔を顔に、あるだけの血を唇に集めて強くはげしく物狂はしいペーゼをくり返しました。惜しさの念が今までの驚怖に討ち勝て、悔恨の情が總ての強迫をおしのけて、公二さんの胸を破れよとばかりかき亂す。その苦しさ、堪へがたい愛着の情。愛する妹よ、妹よ、歸つてくれ、歸つてくれ、おれの胸の苦しさを少しでも知るならば、この兄の心を醫す爲に今一度笑つてくれ!! 苦しい、苦しい、切ない……。

公二さんはもがいて叫んで目が覺めました。夢だつたのでした。しか

し胸は現實に轟いてゐました。

幸福な小蛇よ、智者の蛇よ。自分の愛情を注ぐ女に、自分の胸に溢るゝ限りのパッションを提供する爲に、自分の烈しい愛を現實なものと  
する爲に、相手の乙女の胸にかくの如く深く深く食ひ込めと云ふのか。  
太古人類が先祖のアダムとエヴに無花果の味を教へた奴よ、そして兩人  
に快樂と悔恨を以つて報ひた奴よ。矢張りお前は偉い智者だ。

今のおれは如何だ、成る程自分は確かに熱烈に涼子に愛を献げてる。  
全身全靈をあげて。そして何等の報酬も得ない。それでお前は満足して  
るかと言はれると實に自分の不甲斐なさに泣かれる。時々は思ひあまつ  
てまるで血の様な文字をペンの先から滴らすことはあつても、自分はそ  
れを送る勇氣すらない。弱虫め!!

ヅニーズの女神よ、手を貸せ。そして彼女の胸に鋭い戀の矢を射込ん  
で、強い〜戀の香に酔はしてくれ、口吻しやうが抱擁しやうか後はお  
れの勝手だ。そして彼女をして、

*Je voudrais bien mourir un petit moment s'aparee de vous!*  
*Oi mon cheri.*

と叫ばしてくれ!!

公二さんは物狂はしう轉々しました。

私の生命は其秘密を有つてゐる。私の靈は其神秘を有つてゐる。  
一瞬間に戀が崩え立つたのだ。

惱だ！その惱は望もない、だから私はこれをもみ消さねばならなかつた。

しかも私の戀する女はそんな事とは露知らぬ。

あゝ私は彼女の側に居りながらも孤獨の心を懐いて時を過して行くだらう。

そして思ひ切つて求めることもせず、何も受ることもなく、此世の生活を終つてしまふだらう。

神様は彼女を美しくやさしく造つたが、彼女は足下から起つて来る愛の囁に耳も傾け様ともせず、無心に自分の道を通つて行く。

敬虔の心で嚴なつとめに身を委ねてる彼女は、自分のことで一ぱいになつてゐる、この詩を讀んで云ふだらう。一體この女は誰でし

やう、と。そして了解することが出来ないだらう。

それは薄暗い梅雨の日の午後でした。異形の雲が空に蟠つて、むし暑い油汗のじと／＼と湧き出すやうな。公二さんは一生懸命に佛國詩人アルヴェールのソンを譯してゐますと、折よく孝さんがやつて來ました。早速譯したほやくを讀み上げてきかせました。

首を並べて書齋の窓から雨にけふる遠木立を眺めると、紫が、つた桐の花がポタ／＼と庭に落ちました。柔かい情緒が何より嬉しいものでした。

二人は妙に別れがつらくつて未練らしく纏れ合ひ乍ら夕方戸外へ出ましたが、二度もカッフェへ入つたりして、重たい足駄を引きずり乍ら四時間ほど歩きまはりました。しつとりと露を宿した若葉のいろがようご

ございました。終に雨上りの泥濘を氣にし乍ら、日比谷へ出ました。花やかなアークライトに反射した若緑の艶は、物凄くほど目に泌みました。二人はわざと暗い樹蔭をくぐると選つて、池の畔のベンチに腰を下しました。まるで戀人同士のやうに人目を避けつゝ。背に背をよせて孝さんは云ひました。

「近頃御手紙がありますか。」

この間は公二さんに一種の苦痛と口惜しさを與へました。が、こんな場合には案外軽く思ひがけぬ返辭の出るものでした。

「なんにもありやしないさ。もうそんな話題は云ひつこなした。」

「君、惠美子は決して僕を嫌つてはゐない。少くとも愛してくれる。」

孝さんはまた自分のことを持ち出しました。最初涼子さんの事を云ひ

出したのはこの伏線だつたのだなと、公二さんはひがんでむしやくしやしました。

「先達の訪問の時彼女は常にも似ぬ冷たさを見せたんですよ、僕に失望をもつてのみ報ひた。が、僕が歸宅とすぐ電話で、その短かい數言によつて、僕の耳に温情を吹き込んで呉れるんです。だから僕は、僕は……。」

たゞ父なる人、兄なる人の態度、これが僕には大なる故障だ。惠美ちゃんは何時の場合にも僕よりも元氣よく大膽だけれど、僕は徒らにもかくばかりだ。自由な交際によつて報いられる君を思ふと實に僕はいやになる。」

公二さんはこれをも皮肉なやうに解りました。

夜霧はだん／＼濃く重くなつて來ました。サーシャ……と噴水の音、眞黒な樹々のしげみの底では戀の囁きにも似た葉摺れ。紫銀色のアーク燈は夢のやうな息を吐いて、ちつとしてゐるとむづがゆい様な青葉の匂ひが鼻の先まで迫つてくる。

「君、僕は思ふが惠美子のやうな現代の女性はあまりに強過ぎる。あれでは不都合だ、彼女等は自ら與へる事のみを知つて、受けるだけの情緒と度量に乏しい。……」

「要するに涼子と僕は別れなければならぬんだ。それを考へると馬鹿々々しくて仕方がない！」  
公二さんは投げ出すやうにとんちんかんな返辭をしました。

## 四七

苗賣りの涼しい呼聲が朝々毎に聞かれるやうになつて、縁日の宵は植木屋店で賑はひ、街路樹の柳や篠懸や公孫樹も、こんもりした青葉に飾られました。自然の恩寵をうけて初夏の都會の女は、皆活々と見ちがへるやうな美人になります。殊に蒼白い花瓦斯の光りを浴びた夕化粧の濃艶さなどは眩しいやうに見えます。丁度さうした夕で、公二さんは赤坂見附から何氣なく電車に飛び乗つて、持つてた包を傍の空いてる席へおきました。するとそこへ若い女が來て腰を下さうとしましたから吃驚して取上げました。そのあわて方が可笑しかつたか、囁きの様な柔かな笑ひの氣配が四方から起りました。しまつた、と公二さんはもう眼

のやりばがなかつたのです、車中は遠足歸りらしい妙齡の女學生たちで一杯でしたから。

しかし乗心地は決してわるくはありませんでした。柏葉健兒の自分が美しい注視の焦點となつてゐることを知つて。で、澄ましてモウパッサンの第一頁をあけました。と、前面なる乙女が急に笑ひ出しました。それは涼子さんでありました。

「ヤッ。」

始めて氣のついた公二さんは、突然のことに大きな聲でかう叫びました。その頓狂さに周囲の乙女達は、水の堰を切つたやうに一齊にぶつとふきだして了ひました。

「何處へ？ 横須賀の歸りですつて。——随分遠いんですね。」

「えい。」

涼子さんはやつとこれだけ答へました。俯向いて袴のひもをいちぢり乍ら！ 前髪を透く耳朶が火の様でした。

云ひたい事は澤山ありましたけれど、公二さんももうこれ以上口を利く勇氣はありませんでした。無關心な風をしてモウパッサンの

『野の遊び』

を讀みつけておりました。しかも彼女は何を語るかと始終耳を傾け乍ら。

電車は四谷見附で混んで來ました。その混雑にまぎれて涼子さんは挨拶もなく降りて了ひました、お友達と一緒に。公二さんは何處までも共にあらばやと願つたのに……しかも何の言葉も残さず……。柏木へ歸る

涼子さんはこゝで中野線に乗替るのでした。

常々涼子さんが『私は外で男の方と會ふのは本當にいやでございますわ。そんな時私はだまつてゐますから。』と暗に云譯の様に云つてゐたのを思ひ出して、僅に胸中の鬱憤は慰めましたけれど、一緒に行きたい!! こんな叫びが心の底です。公二さんは窓玻璃に顔おしつけて、夕闇にほんのりと浮いて見える涼子さんの俤をおひました。女同士の輕やかに交す別れの言葉が小鳥の様に聞えます。

機を取逃した、と公二さんは思ひました。つまらぬ、おれは本當に馬鹿だ。自分乍らみじめさにあきれた。おれほど勝手な奴が又とあるか、おれほど矛盾の多い人間もあるまい。

『かうする』と云つて置きながらすぐその裏から『いやこれではならぬ』

と打消して丁ふ。常にこれを繰り返してゐる、それが生活の全部だ。

切角静まりかけた心をかきませる。決心がぐらり／＼と裏返りする。

それはみんな涼子さん故だ、今日も遇はなかつたらば!! と今更思つても追ひつかぬ。もう駄目だ!!! 氣をあせる!! あせる／＼／＼。

殆で喪心したやうになつて麻布の邸へ歸つたとき、公二さんは或物が自分に缺けてゐるのを心づきました。それは兄妹に對する愛でありました。それも涼子さんがおれの心を空虚にしたからだ。おれの胸からすべての紅さを奪つてしまつたのだ。おれは妹達の態度が氣に食はなくなつた。もしおれに涼子みたいな妹があつたらば、と思ふにつけて罪もないのに益々叱り飛ばしてやりたいやうな、憎んでやりたいやうな、わけのわからぬ殘虐な發作がむら／＼と起りました。とも知らず折からお千賀さん



の弾べる、妙なお琴の爪音の洩れてくるのもあはれや物狂はしい瘡癩のたねでした。

「僕は當分家を出て獨りで暮りたい。」

やるせなさには堪えかねた公二さんは、終に突然かう云ひ出してお母様にすべての不平をぶつけました。そのくせ涙は……熱い……湯の様なのが兩の脇から溢れんとしてゐました。齒を食ひしばつて眼を張つて辛うじて抑へましたが、唇の戦慄は止まりませんでした。

お母様はどんなにお心苦しかつたでせう、しばらくは物も有仰いませんでした。公二さんはぐるりと背を向けてしまひました。泣顔をかくす爲に……。

やがてお母様は口を開いて、噛んでくゝめるやうに北海道以來の苦心

特に公二さんの爲に盡された心勞を、淳々と説き聞かされました。一句は一句よりも公二さんの胸に強く響く。それまで總身に燃えてゐた不平不満や悲しみは、みんな悔悟と同情の念の爲におひ拂はれてしまひました。一パイに塞がつてゐた胸もすつきりして……代りに割るゝばかり頭が痛めて來ました。

で、可かげんに話を切り上げて、ふら／＼する足許に力を入れて踏みしめ／＼二階へ上りました。そして手さぐりで電燈をひねつて戸棚から夜具を引き出すと、そのまゝごろりと引被りました。

不覺の涙は止めむ術もなしに溢れます。兩手に被ふた指の透間から……何の涙か自分にもわかりませむ。たゞ胸の底からくつくつと込み上げて來る。蜂谷がどきん／＼と波打つ。お母様は公二さんの後から直に

上つていらつしやいました。そして公二さんの名をお呼びになるのです、細い力のない聲で。

公二さんは餘程だまつてゐやうとしましたが、お母様がお可哀想で仕方がない。そこで出来るだけ厭な顔を見せまいと勉めて元氣を出して、「なんですか。」と答へた聲はまだ怪しく震へてゐました。

お母様は優しく、早くお眠りなさいよと横顔をのぞき込んで、拔足して階段を下りて行かれる。

その足音が消えてしまふと公二さんはいきなり兩手を合せぬばかりにお母様、許して下さいまし、と心の内で叫びました。僕はもうもう涼子さんのことなんか思ひ切ります、そして身體を丈夫にして御安心させるやうにします。僕はさつと誓ひます。

夜はだん／＼深くなる、眠られぬまゝに寢返りばかり幾反轉、階下の時計は寢ぼけた様にポーンポーンと二時を打ちました。

## 四八

翌日公二さんは孝さんと呼んで、昨日からの事を残らず打明けました。そして自分の決心を語りますと、孝さんはびつくりした眼を大きく瞻つて「何故？」と沈痛な一語を發したばかりでした。

公二さんももう多くは申しませんでした。たゞ「あきらめ」あるのみと思つたからであります。今までに涼子さんから貰つた手紙や繪葉書はみな取出して孝さんの目の前でずた／＼に破りすてました。中にもその寫眞を顔の眞中から眞二つにしたときは、申譯がないと思ひました。呪

ひの刃でもあてるやうな気がして……。

寸々に裂かれし巻紙、片々にむしりしペーパー。五彩の花片の様なものを皆嵐のごとき手に丸めて火鉢の中に投げ入れ、ば、むらくくと立つ紫のききな臭い煙り。かうして少しの未練も心の底に残るなと願つたのですけれど、孝さんは面をそむけて静に、

「止め給へ、馬鹿な！ 負けしみ!!」

「何とでも云ひ給へ、これでも自分だけは大きな決心があつての事だから。さア、過去を封じて明日からは、新しい力と歡びを感じて生きるんだ、努力だ、進軍だ！」

## 四九

兩人は學校の構内の涼しい葉櫻の綠蔭の草原に寝ころんで、雑談に耽りました。

公二さんはこのあひだあれほど堅く決心したことですけれど、どうしても涼子さんを思ひきることは出来ない。絶えず胸が痙攣されるやうで切なくてならない、と孝さんに告白へました。そうして草に額をおしつけて、

O ma chere! refusezmoi tout dun coup,

と讒語の様に打呻きました。そしたら君は死ぬであらう、と孝さんは云ひます。否、それは當らない、おれは Je ne bemand pas mieux! と答へるであらう。こんな長たらしいろくでもない夢は早く醒めるが可んだと、公二さんは靴底でたゝら踏みました。

孝さんもや、改まつて云ひ出しました。

「僕も決心した。決心といふと大變に聞えるが、それは何でもなし。徹底した生を享けたいと云ふのです。換言すれば僕は自我の生活に入りたいのです。」

然し公二さんは黙つてゐました。おれだつて色彩の濃い自我の生活がしたい。でもそれが出来ないんだ。「お前は誰の爲に生活してるんだ。」と訊かれたら「おれは人の爲に生きてるんだ。」と答へる外知らない。馬鹿な！と嘲はれても仕方がない、考へて見れば馬鹿々々しくて仕方がない。でも實際自分の生活は全で人から左右せられて居る。

「駄目だ、母がある、家庭の事情が許さん。おれが自我！あくまで強い自我を徹底させたらおれの家はどうなる事であらう。母が可哀想だ。」

駄目だ。到底駄目だ。」

孝さんはなほ語をついで涼子さんに對して君はあくまで熱烈な態度をとれ、とすゝめるのでありました。結果は敢て問ふ處でない、ぐづぐづせずと短兵急にやり給へ。君は卑劣だ。自分の心の内に起つた猜疑の眼を以て涼子さんに對する、そして涼子さんの純粹の愛情を悪意に解する君は自分で自分を苦しめてゐる。僕ならそんなにくよくよしない。

涼子さんは君の訪問の度毎に深切さを増すのではないか、涼子さんの手紙を見給へ。あの愛の籠つた手紙を！今暫くだ。そして成功不成功は君次第だ。君が大學を出るまではたしかだ。彼女は誰にも奪はれぬであらう、やつぱり君を樂ましてくれる。僕は君を祝福する。

孝さんはいつともかう云ふ持論でした。けれども公二さんにはやつぱり

それが、嘲弄氣味のやうに聞かれました。なほ孝さんはさも確信を見せた調子で、

「今度こそはあの結末をつけます。鎌倉の叔父がまた航海に出るので、留守が淋しいから遊びに来てくれと云はれました。試験がすんだらすぐ行くでせう。そして叔母さんに頼んで惠美ちゃんを呼んでもらひます。多分これが僕等の最後の解決をつけるでせう。君も來給へ。」

「然し僕が行つてはお邪魔になるだらうから、まあよさう。」  
「馬鹿な！」

と噛んだ物をほき出すやうに云ふ。

## 五〇

六月の十九日に卒業試験が終りました。何となく肩の重荷が下りたやうで心うれしく、珍しく公二さんは學校の歸りに三丁目の望月寫眞館で一吋、一高の帽子を脱ぐのを記念する爲に撮影したりしました。

そして今日こそは兼て思つてゐたことをすつかり聞いて貰ふつもりで柏木へまはりました。案内知つた裏庭から例のお座敷の縁側に腰を下しますと、涼子さんがしとやかに紅茶を持って來ましたので、公二さんは引きとめて、暫しの沈黙の後、

「涼子さん！ 僕は全く貴女を怨みましたよ。」

と云ひ出したとき自分乍ら頭がぐら／＼しました。涼子さんはお盆を持つたまゝ耳の根まで眞紅になつてうなだれましたが、めつと面をあげて辯解しはじめました。

「松平さんが貴方と私のことをお麗さんに話したんですつて。私もう何と云はれたつてかまはないと思つてゐましたの、だけど先日赤坂見附ではまるで驚いてしまひましたわ。皆さんが、誰だ〜と聞くんでせう。仕方なしに親類の方だと申しましたの、何度云はせられたか知れませんか。そしてわざと左様ならとも申さずに失禮したんです。すると後でみんなに弄かはれて困りましたわ、ほんとうに……。」

そこへ博士が這入つて來られました。涼子さんは逃げる様に座をすべり出る二人きりで、話をしてゐるといつもこの通りなのでした。公二さんはもう歸らねばと制服の膝を正してもち〜しました。

博士はお兄様の近況を頻りと尋ねられて、そして公二さんに、兄の様では困る。勉強して早く大學を出ろ！と云はれるのでした。それが非常

に公二さんを激させました。博士も矢張り兄を普通ののらくら者と思つて居られるか、失敬な!! 分らずやめ、私の兄はそんな人間ではないんです。たとひそれが先生の云はれる通りであつたにしろ、私に對して兄の悪口を云ふとは!! 否、否、勝手に思へ。どうとも思へ。今に見ろ、人に負てなるものか!! 残念!! 勉強だ、歸つて勉強だ!! と自分がいま目の前で侮辱を受けたやうに火の様な悲憤が胸元にこみ上げました。しかし博士は何も老婆心から、弟にはかくあれかしと案じて下さるのだもの、感謝しなければならぬ。とは萬々承知しながら、博士のお言葉のきれるより早し、暇を告げて一目散に家路に就きました。心の中で残念!! と叫び乍ら……。

涼子さんは、博士の背後に小さくなつて、お玄關に見送つてゐました。

大學の入學試験もすみしました。出来たか出来ぬかおれは知らぬ。然し京都へは行かぬつもりだ。これから旅行だ。と公二さんは子供の様になつていそくと、青木堂で買ったベルモットを一本片手に下げ、片手にピスケットの包を抱えてばいと電車に飛び乗つて了ひました。取残された友人達は驚愕の眼を瞻つて見送り乍ら、狐につまゝれたやうに佇立してゐました。

それは夏と云へば暑いに極つてゐるものゝ、殊にこの二三日時々驟雨のばら／＼と来るやうな空合で、水蒸氣が濃く重く頭腦を壓して感じの悪い膚からはじり／＼と焦るゝ様な汗が湧き出す。風は生ぬるく、砂塵

がポツ／＼と上つてゐました。

公二さんは近頃益々人と離れて來ました。上品ぶつたむづかしい議論などは眞平御免で、今迄親しかつた辯論部の連中に非常な嫌惡の念を持つやうになつたのも、一つはこれが爲でした。こんな行爲が遂に公二さんの心から愛や友情といふものを根こぎにしてしまつて、その反對に一種の惡しみを生ずるやうになりました。涼子さんに對してまでも。

そしてすつかり瘦せましたのでお父様は公二さんを慰めて、この夏はゆつくり遊んで來いと過分の旅行費を下さいました。父母の爲にも一日も早く身體を直さねばならぬ、と氣を取直して公二さんは旅行に出る前に今一度吉野家を訪問しました。最後の別れを告ぐる爲と云ふ覺悟で!! 半年前と今門をくゞる時の心持の相違はまあ何といふことでせう。奥

庭の茂みはいつに増して緑濃く、夫人は常に深切でありました。涼子さんの面には白玉の様な艶が溢れて、いそ／＼ともてなします。然し公二さんの心は暗く沈むでゐました。希望の光明も絶望の淵にまでは、その恵み深い光りを投げません。胸の鼓動は平靜で、晨の湖面の様でした。涼子さんの表情にも態度にも特に何等の注意も拂はねば、興味も持つてはならぬのでした。以前には月一回の訪問がどれほど待たれた事でありましたらう、どれほどの愉快に酬はれて、どれほどの希望に充ちて歸り／＼したことでせう。それが今は如何だ、と思ふと残念で堪らず意識せぬ涙が……公二さんはあわて、拳で引こすりました。

この日はおもに博士とばかりお話して、お兩人には御挨拶もせず、もう顔も見ず逃ぐるが如く辭し去りました。そしておれはかうしてとうとう

う涼子さんを心の中から追ひ出してしまつた、これからがおれの活動の時機だ、ヴァンジャンスの戦だ!! と叫びました。

## 五二

七月の末に東京を立つてから、或は伊勢に坂神に京都に海に山に、公二さんは随分目眩しく飛び歩きました。後になつて考へてみるとそれらは何等の實質もなく、胡麻化しの跡のみ歴然と數へられるやうで、たゞ時間を過したと云ふに過ぎなんだ。卑怯な方法であつたとも思ひましたが、公二さんにとつてはその場合他の方法がなかつたのです。あの魔の様な絆からのがれたいと思ふ一すぢに切なる努力であつたのでした。けれども伊豆の山間の長岡温泉は氣に入つて、二句に近く留返してゐ



ました。ゆるやかに延つた山脈とそしてその滴る様に柔かい若緑の色と  
 清い山の水とは、どんなに公二さんを樂しませてくれたでせう。朝まだ  
 きまだ深い眠りから覺めぬ宿をぬけいで、公二さんはよく小川に沿ふ  
 た百合や撫子咲く森に身をかくしました。そうしてはてつた兩足をそ  
 つと下草の白露の上のせて、いろんなことを考へるのでした。静寂で  
 した。歸る頃には十國峠の方の空がうるはしく彩どられて、眞紅な太陽  
 が溶けさうに揺ら／＼とさし上ります。朝霧のウエールを被いで川の面  
 はちら／＼躍つてゐます。

お友達からの手紙にはよく云つて來ました。君、涼子さんの事を思ひ  
 出さないか、と。公二さんは微笑をもつてこれを葬り去りました。成る  
 程自分は最早あきらめて涼子さんを思ひ切つたのである。然し全然涼子

さんのことを念頭から忘れてしまへと云ふのは全く不可能事である。殊  
 にあの山の若緑!! これが過ぎにし伊東の春を思はせないですまうか、  
 散りかゝる緋桃の花こそなけれ。

山間は秋の立つのが早うございます。深みゆく葉のみどりにも、梢を  
 渡る風の音にも、もうしんみりとしたうら寂しい氣が流れて居ました。  
 たい白い日光の眩ゆくみなぎつた空の色のみが、僅に夏らしい明るい感  
 を抱かせるばかり。秋だ! かう云ふ叫びが勢よくお腹の底から湧いて  
 來る。

### 五三

公二さんは九月の初旬東京へ歸ると、すぐ孝さんを訪ねました。

「どうだつた!」

孝さんは眞珠の様な皎齒を見せて微笑しながら、うれしさうに迎へました。公二さんは黒くなつた腕をまくり上げて、こんなに太つたと云はぬばかりに椅子に腰を下しました。

レースの窓掛をそよがして東南向きの窓から涼しい風が吹き通すので公二さんはしとゝの汗もとみに乾いて、卓の上にうづたかく積んである書物を片端から取上げて頁を繰つて見ました。レミートグールモン——フランス——いろ／＼なのがある。孝さんは矢張り幸福だ!! と思つて公二さんは太息を吐きました。

十二歳になる富貴子ちゃんも暫く見なかつた間に、二つも年長けた様に大きくなつてゐましたが、突然公二さんの膝に飛びついて胸に顔を埋

めました。のび／＼とした靴下に軽げな洋装、眞中から分たお下髪頭をふり乍ら。これが涼子さんだつたら、と思ひ乍ら力一パイ抱きしめると、苦しがつて脚をびん／＼させる。スツと出てゐる細い腕の薄すりと狐色に焦げたのも可愛らしい。お兄さまに似た人形立の容貌よし。

談話半ばにお玄關の方で賑やかな笑聲がして、大きい方の妹さんの緑さんが鎌倉から歸つて來ました。叔母さまも御一緒らしいございました。活潑な緑さんはまだ帽子も脱らすに此宿へ這入つて來るといきなり、

「兄様、お二人の秘密を聞いちやつてよ。叔母さまと一緒に散々笑つたのよ。随分可笑しかつたわよ。」

と可愛い顔を眞紅にして、身體を二つに折つて笑ひつけました。

公二さんは眞面目になつて、それが何を意味するものであるかを知ら

うと大いに力めました。が解りませむ。孝さんは苦笑し乍ら、例の事件が叔母さまに漏れた理由を説明しました。

いつぞや孝さんが伊豆から鎌倉へ行つたとき、

「ねえ孝ちゃん、矢野さんの御病氣は、何でも餘程お安くないんですつてね、えい。」

と不意に聞かれて度膽を抜かれた孝さんは、なんですつて？ とたい云つただけでした。

「え、名は何と云ふの？ 貴方もうちやんと知つてるんでせう、御親友ちやありませんか。」

「知りません、僕がそんな事。」

「よし、それならそれで可。今度矢野さんが來たらうんと油を絞つて、

思ひ切りいちめて上げないぢや。」

と叔母さまは得意さうに笑ひました。

僕はその時だけはほんとに驚いてしまつたよ。その上なんと云ひ出されるかわからないんでね、と孝さんは一息に紅茶をあほり乍ら哄笑しました。

その實自分のノートの片端に誰の戯書か孝さんと惠美ちゃん、公二さんと涼子さんの名を並べて書いて、そして和歌が添へてあつたのを何時のまにか叔母さまに発見されたのを、孝さんはすこしも知らなかつたのださうでした。

秘密で終る秘密は無い？ と公二さんは打ちうめいて、何だかつくづく恐しくなつて來ました。自分はどうなつてもよいやうなもの、萬一

こんな噂がひよつと涼子さんの御両親の耳にでも入つたら何とせう。  
 「ね、君、最早心のスタビリティの出来上つた今となつて見れば、こんな事ぐらゐは何でもないが、これが正月頃の事だつたらまた病氣にでもなる處だつたらう、ほい命が惜しいわ。」

## 五四

涼子さんばかりが女と云ふわけではなし、公二さんの周囲には、友人の妹さん方や親戚のお嬢さん達やら、どれも蓄の花ながら先生偲ばるゝ美しい少女たちが澤山ありました。お麗ちゃんなどもその一人でした。公二さんはこの少女によつて涼子さんに對する不満足をいくらか充たす事が出来るやうになりました。それは最初の程は涼子さんに對する

誠心からして、つれなくお麗ちゃんを疎んじました。しかしわざと疎んずると云ふことそれ自身が、既にお麗ちゃんの赤い純潔な頬や心臓の方に幾分なりとも惹きつけられた證據でした。

男同胞のないお麗ちゃんは昔から親類の公二さんを、兄様と呼んでゐました。そして何でも兄様／＼と云つて無邪氣に慕つてくれる。散歩にも連れてつて頂戴と甘へる。何といふ可愛い奴だらうと思ふ事さへありました。

で、おれはもう日曜の外は遊ばないと固く心にきめてゐながらふとお麗ちゃんから、地理の不審を伺ひたいから是非來て頂戴などと電話をかけられると、明日まゐりませうとつい返辭してしまふ。そんな事で何が出来る、と直ぐ後悔して自分を叱つて見てもおつつかない。

翌日學校の歸りにまはると、ダリヤや秋草の咲き亂れた庭に向つて机を据たお下邊のお麗ちゃんは教科書をひろげてゐました。公二さんはいきなり上衣を脱いで麥湯を飲む、つゞけさまに三四杯！ それでやつと人心地がつくと、お麗ちゃんは膝を向け直して、ちろ／＼と公二さんの顔を見てゐましたが、

「貴方は交際家ね。」

と突然口を切る。

「何故？」

と公二さんは葛饅頭を一息に二つ三つ頬ばりました。

「だつて近頃は吉野さんへばかり行つてらつしやるんぢやないの。そして家へなんぞは少しも來て下さらないのねえ、ひどいわ。」

「何だ、そんな事か。つまらない！」

苦笑にまぎらすのを追究するやうに、

「涼子様は美人ねえ。」

「なあんのこつた。」

「でも貴方は佛英和で大變な評判よ。何でも涼子様が非常に褒めるんですつて。眞面目で親孝行でよくお出來になるつてねえ。——破けた靴をはいて破けた夏帽子を冠つて、いつでも電車の中でフランス語の小説を讀んでお出の方つてみんな知つてゐるわ。さう／＼、松平さんや有田さんが云つてましたわ、先日も甲武線の電車でお友達と並んで腰を掛けて、『君ね、何故露西亞の女はかう氣持がよい程はき／＼してるでせう。例へばサアニンのカルサヴィナ……僕は現代の女性にあんな人

があつたらと思ひますよ。』なんて話合つていらしたつてねえ。』

公二さんはもう相手にしないで、口笛を吹いてゐました。と、お麗ちやんは涙に霞んだらしいのを、ちいつと瞬つた眼の大きさ、美しさ。うつむいてしまつて正面に顔は見せませんでした。その小さな心臓の烈しく波立つてゐるのは、軽いもすりんの單衣の胸が鼓動毎にあほるやうなので知れました。

お前はまだ若いよ、可愛いよ。人間はその時分が一番楽しいんだ、と公二さんは心の中でつぶやきました。そうしてその繊細な身體をわがたくましい腕で思ふ存分抱きしめたうございました。何心もなくひしと寄り添つてゐるお麗ちやんの薄い衣と白蠟の様な肉を通して、火よりも烈しい熱が公二さんの四肢に顫動を與へます。けれど公二さんはどうして

よいかわからずになつた、お麗ちやんの片手を膝の上にあづかつたまゝ、なほ無關心らしく口笛をついてゐました。

## 五五

公二さんは學校の歸りに濡れた傘をぶら下げて、室町の新之助さんの處へ寄りました。新之助さんはつい二三日前北海道旅行から歸つたばかりで、二ヶ月も會はなかつたのですから話は山の様に溜つてゐる筈でしたが、逢つて見ると別に何のこともない。矢張り新さんと自分だと思ひました。

兩人は泥濘を踏んで魚河岸に沿ふてこゝかしこ彷徨ひました。淡い夕靄の中に寶石を置き並べた様に見える灯の瞬きを眺め乍ら！そして空

腹の半は屋臺店のお鮓の立食で出来ましたけれど、猶電車で銀座まで行つてしまひました。

二人はとあるカフェエの二階へ上りました。高度な花瓦斯がきまりのわるいほど明るく照つて、大理石張の卓の白い色が寂しい。注文した品は並べられても、二人とも食べ様ともせず飲まふとも思はず、伏目勝に車上の灰皿を弄そんで居りました。コップの泡は徒らに立つに任せて……。

と、突然新之助さんが口を切りました。少し頬を紅らめた氣味で、『ねえ、君、僕ね今大變な事に係つてるのさ。ある家でね、養子が要るんだ。僕の家のお親戚さ。君行かないか？ 財産はあるせ。』公二さんは泣きたい様な笑ひ出した様な一種息つまる様な妙な氣分

に壓倒されて、暫しの程はたゞ黙して友人の面を見入るのみでした。が、やがてその視線を白壁の方へそらすと、すうと暗い黑影が自分の心を明るみから死の陰に引張つてゆくかと思はれました。生眞面目な顔を頬杖に据て、返辭いかにと期待してゐる新さんに向つて、

『戀の爲の戀と云ふものはあるかしら。そして人は戀に破れたときは、もう過去としてこれを葬り去ることの出来るものだらうか、もし思ひ出となつたら甘さを覚えるであらうか、苦惱を感ずるものだらうか。』

お門ちがひのこの反問に驚かされて、怪しむやうな眼眸に頭の方から足の方まで測量でもするやうに見下した新さんは、何もかも總て了解してゐると云ふ調子で、

「もつと具體的に云つてくれ給へ。一臂の力は貸すものを。」

と静に云ふのでした。幸ひ周囲の卓にも客は一人もゐませんでした。丁度好い機會だと興奮しきつて公二さんは語りました。そして自分のしたことにジャスチイフイケーションを與へて貰はうとしました。ところが逐一聞き終つた新さんは、

「君の戀はそれは遊戯です、一個の玩具です。」

と思ひがけなくも大變攻撃しました。その公二さんの神聖なる戀を！そして、君は眞の戀の魔力に觸れる爲に、然りか否か聞く爲に、もつと突進して自分の赤心を披瀝せねばならぬ。君は卑怯だ、否と云はれる事が恐ろしいのか。然しそれはどうせ聞くべき宣告を少し延引するに過ぎぬ。そして打撃は今よりもひどからう。それに君は涼子に苦悶を與へる

様な事は、到底忍びられぬなんてことを云つてるやうだが、そんな犠牲的な態度を持してゐてはこんな事は駄目です。もつと徹底せねばならぬ、と。

折しも一群の連中がどや／＼と上つて來ましたので、二人は勘定をして立ち上りました。戶外へ出ると屋根の上に天の川が眞白う流れて、露店のカンテラのゆらぎにも、大路の柳にももううら悲しいほど涼しい初秋の微風が動いてゐました。

## 五六

その後とても吉野家へ行かなければならぬ機會は度々ありました。たゞ公二さんの感激が以前のやうではなくなつたので、おれの心の中に



は最早パッションが無くなつたらしいと自分でも思ひました。

晚餐の用意が出来たからなどと引きとめられても、面白くもないのですぐに歸り／＼しました。涼子さんはすこし痩せました。それがいつもより一層美しい。公二さんももう思ひ切つてちつと相手の面を凝視することの出来るやうになつてゐました。涼やかな黒瞳のうるみが今にも溢れさう！ あれがアムールの泉でなくてどうせう。あれが乙女の眞の力でなくてどうしやう、口吻けてすゝりたい位、燈火になど映ては一入キラ／＼して！！

公二さんはなんだか小鳥に逃られた様な気がするのでした。別に惜しいとも思はぬが物足らぬ様で……。

## 五七

お母様は大阪へいらしてこの一週間ほどお留守でした。

或日公二さんは學校で散々頭をなやませて歸つてくると、彼地の御親戚から手紙が來てゐて、お母様が御病氣御入院との事でした。病症はどうも窒扶斯らしい……。

今日はなんと云ふ日だ！ またもや悪魔がおれを闇暗に引ばつてゆく努力がおれを裏切つた。何をやる氣力もない。悪魔と云ふ奴は何處までその毒手をさしのばすのであらう。切角人が丹精して美しい眞紅な花を咲かせやうとすると、ほんの瞬間にばきりと莖を根元から折り取つてしまふんだ。と書齋の墨のうへに打倒れたまゝ、泉子さんがお風呂の加減

のよいことを知らせに來ても、身動きもしてませんでした。

憂愁にみちた同胞三人きりの夕餐を寂しく終ると、公二さんは久し振りに散歩に飛び出しました。やゝ冷た過ぎる宵でした。しめつた空気の底に花の如き灯が輝いてゐます。勢よく走る電車、廣告燈の明滅、雑踏のさいめき、なやましい胸をマントの下に抱くやうにして、公二さんは銀座の街の並木の下をふら〜と歩いてゐました。

歩きながら考へてみると、公二さんはつくづく自分ながら自分が憫然でたまりませんでした。それや若いんですもの、自分だつて出来るだけの快樂や華やかさを望みます。然しながら「犠牲」だの「偽善」だの「虚榮」だの「ミリュウ」だのと云ふ大きな手が、常に頭上をおさへてゐて自由な活動をゆるしません。挺身して自ら享樂し陶酔し得る事が出来ま

せんだ。からむしろ徹底した遊蕩兒の群が、羨しく思はれて仕方ないのでした。

が、ふと我に返りますと、穴あらば這入りたい様な氣持になりました。勉強だ！とそれからまつしぐらに邸へ歸りつくや否や、袴も脱らす帽子も冠つたなり本箱をあけて参考書を引張り出してゐるところへ、お千賀さんがあはてふためいて電報を持って來ました。受取らうとする手も渡す手も、ぶる〜震へて仕方がありませんでした。

果してお母様が重態と云ふ報知でした。公二さんはもしこれを齎した人がお千賀さんでなかつたらいきなりこん畜生めと撲つたかも知れませむ。青い切手の眞二つに裂かれた柔かな電報紙を膝にのせて見つめてゐるお千賀さんの眼にも、迸しらぬばかりの涙が充満でした。公二さんは

夢中で郵便局へ飛んで行つて、打返して容體の問合せやら、けたしまし  
くお兄様のところへ電話をかけたなり、お父様へ電報を打つたりしました。  
これで母が死んで見ろ、殆んど両親を失つたも同様なこの憐な四人の  
同胞は如何なるのだ。妙齡の妹を如何するんだ。自分と母！かう思ふ  
と、どうしても自分は自分の爲に生在してゐるのだなんと云ふ考へには到  
底なれない。おれは母の爲に生きるんだ。母あるが故にわれあり、われ  
あるが故に母があるのだ。おれが中學に入つてからの母さんの苦心！  
おれは親不孝な人間だ。然しこの事に考へ及ぶと自分は必ず偉くなつて  
安心させてあげねばならぬと思つてゐた。人から見たらば極端な形式主  
義な奴だと思ふかも知れぬがさうだつたのだ。

母が死んだらおれは如何したらよからう。おれは妹達や涼子さんに

「死」と云ふものがあるなどと考へたことはまだないが、母について、  
常々から不吉な不安におそはれる。それは勿論艶々しい腫や丸々と脂肪  
に富んでゐる若い女から直覺的にその人の死を思ふものは誰しもあるま  
いが、母の様に苦勞に壓倒されて了つた瘦せた肉體を見ると、悲哀を感  
せずには居られない。

先日柏木に行つたときも、涼子さんと夫人は口をそろへて、

「御勉強して母様を安心させておあげなさいな。仲々孝行は出来ないも  
のですから、御丈夫なうちになさい。亡くなられてから悔いても仕方  
ありませんよ。」

と云はれた。實にその通り自分だつて孝行したいものだ、せねばなら  
ぬと思つてゐるけれども——心の内ではどんなに希望してゐたらう、どん

なにあせつてるだらう。然しそれが出来ないんだ。おれは泣きたくなる不甲斐なしめ！ 最後におれを導いてゆく所は何處だ。

野分の木の葉が風にまかれて廻るやうに、公二さんの頭は旋廻し出しました。座つてゐる疊がせり上つて、自分だけすん／＼地底へ沈んでゆくやう。飛び立つていきなり電燈をひねると、あとは暗闇！ 公二さんは頸窩を抱えて思はず、お母アさん、神さま、と叫んだのでした。

## 五八

大阪へはお兄様が急行されました。

が、其後は幸ひにして病人も持ち直して、一日増しに快く、回復期に入つたとの吉報ばかりがありました。

秋晴の空は實に瑠璃のごと高う澄んで、庭前の楓の紅が燃るやう。

吹く風も枝を鳴らさず、小鳥は聲高に秋の歌を頌してゐます。そこに自由があるんだ！ と思ふとこの日頃籠り勝にしてゐた公二さんは一時も早く戸外に飛び出して大口開いて呼吸してみたくつて堪らない。郊外にでも誘はうと孝さんに電話をかけて見ますと、孝さんもおかあさまが御病氣でこの頃逗子へ轉地して居られる。で、今日はこれからそこへ出かけるところだとのことなので、二人は期せずして連れ立ちました。

逗子の櫻山は雜木林が黄金色に染まつて、満山錦繡の様に午後の陽に輝り榮てゐました。あらゆる夏季の別荘は今は大方向を閉ぢて、籬も壊れ庭も荒れ、たまく／＼人の住む家には病人のものらしい華美な色彩の布團などの二階の欄干に干してあるのが僅に單調を破つて、それが更に一

層の寂しさを増すのでした。

今年の一月公二さんは孝さんと二人で、敗残のからき生から自分を救ひ出す爲に、陽も沈む夕つ方を冷い凍るやうな雨交りの風にふかれて此地に下りたことを思ひ出しました。あの時分はほんとうに煩悶してゐましたつけ、そして森戸の神社の處で一晩泊つて千鳥の歌に耳を傾けたのも、今はたゞ一挿話としての記憶のほか残つてゐない。もうあの様な熱情も今はない、觸れれば流れる様な紅い血も色褪せてしまつた。グイグイドな血管の鼓動もしない。

清らかに白く瘦せたおかあ様は、それでも病床の上におき直つて幼い人たちを膝下を集めて、いろ／＼なお嘶をさせ乍らにこやかに笑つて居られました。場合が場合故身に引きくらべて、公二さんは胸が一ぱいに

なりました。孝さんの兩腕にはどれほどの重い責任がかゝつてゐるか、そして人よりも特別に繊細な友の身體を思ふとき、公二さんの眼には人知れず熱い涙の溢るゝを覺えました。

立派な家に生れ偉い父を持ち愛しい弟妹の多くと美しき戀人を有する友よ、君はひたすらに恵美子さんの樂しい戀の夢にのみ耽つてゐるがその中にこの君の母、優しい病める母の上を思はぬであらうか。はたまに母を失ふたなら、この可愛い弟妹達はどうなるであらうと君は考へぬであらうか。成程戀は總てである。われらは若さを欲す、歡樂を望む。戀の爲には親もない兄妹もない！これが自分達の理想であらう。が、強き友よ、僕にはそれが出來ないのだ。

枯葉のそよぐ蓮池にかさこそと夕風が渡る。磯邊の秋もわびしい。暮

れゆく縁の柱に身を凭せて、小兒達の嬉戯の聲を背後に聞きながら、公二さんの感慨は無量でした。

## 五九

涼子さんが夫人の代理に、お留守見舞に来てくれました。

折あしくと云はうかよくと云はうか、二人の妹さんは打揃つての外出中でしたので、御主人役に公二さんは獨りまごく。しかし出来るだけの禮儀をもつて迎へました。

涼子さんは桃割に結つてゐました。青磁色に紅葉の刺繡模様の半襟が黒地の縞お召を一層意氣に見せて、金通しの白茶地の帯をいつもの堅矢ではなくお太鼓に締めたのも大變大人びて見えました。二階の廣いお座

敷で、暫く二人は話しました。無論話題はお母様の事ばかりでした。

「涼子さん、母は大病に罹つて實に生きるか死ぬかの境だつたんです。

涼子さん、母が死んだら僕は如何しやう……そんなことがあれば僕は死の宣告をうけたも同様です。否、それよりも一層苦しいかも知れない。

僕は今迄母の爲に生きて來たんです。涼子さん、家の母は若い時から異郷に旅立ちして、下僕女中と同じ生活を経て來た。そして餘りに苦勞をし過しました。僕の爲に兄の爲に父の爲に。

僕の十四の年に父は——勿論その當時の種々の事情があつたからですが、僕を百性にして縁家の一人娘のところへ婿にやる考へでした。母はそれを悲しく思つて極力反對した。父はひどく怒つたけれども、

たつた二人男同胞を手許において思ふ充分修業させる事も出来ないで  
は、あまりと云へば親甲斐もない。

そこで母はそれまで使つてゐた女中を解雇して、僕を中學校へ入れて  
くれたんです。僕が郷里から虎の門の邸へ出て来た日から、母は朝か  
ら晩までお臺所に引きこもつて立働かなければならなかつた。

僕は本能的に母の爲に勉強せねばならないと思ひ込みて、何等の不平  
反抗がなかつた。早く偉くなつて母に安心させやう、ただ一圖にかう  
考へるのでした。母の爲の希望、母の爲の努力、僕の生活はさうだつ  
たのです。従つて生そのものに對する煩悶もなかつた。

それなのに今母に死なれて御覽なさい。僕は生きる對象、努力の目的  
がなくなつて了ふではありませんか、僕は運命のあまりの強い打撃に

泣くにも泣けなかつたのです。」

「だつてそれは止むを得ませんわ。人は親でも同胞でも死ぬ爲に生きて  
る様なものではありませんか。もし貴君のやうに論じてゆくと、すべ  
ての人は自分の生の對象を失つたときには死ななくちやならなくなる  
ぢやアありませんの、昔の殿様と近臣の様に。人生といふものはそん  
なものとは思はれないの、利害から打算した人の群、それが社會ぢや  
アないのでせうか。理屈はともかくとして……」

「いや僕は社會全體を標準にして論ずるのではないのです。そして他の  
人はいざ知らず只自分と母、かう狭く考へて見るときに……」

「まア待つて下さい。——現代の青年で貴君の様な思想を持つてゐる人は  
ごく少い事と思ひますわ、そして貴君は幸福でもあり、又不幸ですわ。

なせつて……私が恰度そう云ふ状態にあるのですもの。」

「然し涼子さん、僕は繰り返していふが社會全體の人が僕の様な思想を持つてるといふのではない、僕は極く狭く僕と母との間についてだけの事を云つてゐるのです。僕は田舎の百性に埋れなければならなかつた——その處を今の母に救はれた。自分の好きな學問を修める事も出来る様になつた。僕は知己を得たのです。人生意氣に感ず、功名また誰か論せん、僕は自分の名譽榮華、そんな事は少しも思はなかつた。ただひたすらに母の心安めん爲と十餘年の長い年月、一生懸命に勉強した。理屈は少しもない、ただ母の笑顔見ん爲にでした、——極めて果敢ない努力！ と罵る人があるかも知れない。その自分を理解してくる人が危ふいというんだ、かう考へるときに

努力の綱のフツツリと切れるのはあたりまへぢやないですか。人は己れを知る者の爲に死す、僕は母の病氣が氣になつて……本當に仕事も何も手につかなかつた。」

「それでは代りに自分を解してくれる人を見つけたらば——又努力の意味が出て来るんですか。お母様がおなくなりになつたとして——假定ですよ、貴方はお母様の事なんか忘れて了つて、新しい知己の爲に生きて行かうとなさるんですか。そうすると自分を知つてくれた人の爲に生きると云つても、それは非常にアルビートルなものですわね、貴方も利己主義な方ね。」

「然し涼子さん、僕はあまりに世間を見ないからかも知れないが、母の外には自分を理解して呉れる人は一人もいないと思つてゐるのです。」



「嘘です。……嘘だといふことを貴方は知らないんです。いゝえ知つてゐらつしやるんです……。」

と矢庭に俯伏した涼子さんの桃割は、公二さんの膝の上にあります。公二さんの顔は蒼白でした。云ふべき言葉も知らぬやう、ただ唇が顫へてゐました。眼には涙が充満でした。

やがて低いけれど凄い、そして感激の調子を帯びた公二さんの聲が聞えました。

「涼子さん、貴女は僕の爲に「何處へ行く」のリジアになつて下さい。今の場合僕を救ふものは貴女の外にないのです。——」

かう云ひかけた時階段を登る静なスリツバの足音がしました。お千賀さんが歸つて來たのでした。公二さんの勇氣は俄に頭をもたげて、ルビ

コン河を渡るべく一躍馬首を汀に進めました。涼子さんは渡された手紙を、そのまゝ無意識に温い懐の奥深くおし入れました。殆んど突嗟の間だつたのですもの、お互に何を考へるひまもなかつたのです。

お千賀さんが座に現はれてからは、黙りん坊の公二さんがほんとに不思議なほど多辯で快活でした。この場の様子を覺られまいとする疑勢だつたのですれど、かへつて怪しまれて眼を大きくして、

「まあ涼子様、うちの兄は如何したんでせう。平生あの沈黙家のくせに今日のこの御機嫌は。」

「あら！」

と云つたまゝ涼子さんはぼつと紅くなつて俯きました。

「僕はね、涼子さん、貴女が來て下さつたので、それがこんなになうれし

いんですよ。」

そんなことを云つて笑ひ乍ら、歸途をば兄妹して電車の停留所まで見送りしました。空は厚い雨雲に蔽はれて陰氣な夕方でしたが、公二さんの心は絶對に明るく、満足しきつて幸福に別れました。

家へ歸ると、

「お嬢様、涼子様はお美しくございますね。」

小間使の濱がお千賀さんの脱捨を仕末しながら、さも感心したやうに話しかけました。

「それや美人よ、我輩の戀人だもの。」

公二さんは疊の上に寝そべり乍ら、臍の緒切つて以來始めてのこんな戯談を口にしました。が、お千賀さんは聞えませんと云ふ様な調子で、

せつせと着物を着替てゐました。涼子さんとお千賀さんとは、さう氣の合ふと云ふ方ではありませんでした。

## 六〇

おれは涼子にいよく自分の戀を告げた。それに對する最後の意見を求めた。あとはたゞ運命の神がよろしくやつてくれる、とわれから呑氣にかまへてはみたもの、矢張り心配になつて堪らないので公二さんは新之助さんの處へ遊びにまゐりました。そして昨日ありし事件ども語るうちにこの友は、君、それはいけない。極めてまづい手段だつた。やがて來るべき成功？を自分の手から破るやうなもの、もし彼女が君の申出を待つてましたと云つて直ぐに容れてくれるのならばこの上もないこ

とであるが、或は彼女は君の告白によつてかつ驚きかつ嫌惡の念に驅られやせんかしら。さうすると君は自分で自分の未來を呪ふことになる。餘程うまくやらないと、と云つてくれました。が、公二さんは頭をふりました。

「それは元より結果といふことを考へては出來ぬことだ。結果は眼の前に見えてゐる。すべてがおれに不利なんだこの不利を歴々と見てゐながら、敢てするおれの心を知るならば、直ぐに仔細はわかるだらう。」とせか／＼眉をこすり乍ら。

「新之助さん、僕と涼子とはたとひ僕等の戀が順潮に進んでも、結婚が出來る身の上ではない。戀と結婚、これは目的を異にしてゐる。戀は必ずしも結婚の爲の戀ぢやない。また君の意見とは反對かも知れぬが、

僕は戀人の肉體の占有、握手、を戀愛の要件としてない。他の人は精神的戀愛では満足が出來ぬと云ふ。肉體の結合を要求するに至る。が、一度その満足を得たときが戀愛の最上でその黄金時代であらう、と同時に下り坂であらねばならぬ。人はお互に戀人を自分のものにしたその瞬間から、今度はそれを失ふまいと悶える。嫉妬をする。肉に囚はれて了はねばならぬ。怒り、惡み、嫉み、人殺し、すべての罪惡はこれに根をおいてゐる。

僕はあくまでも精神生活を根底とした生き方をしてゆきたいんだ。それが僕の住む世界なんだ。その上に涼子はまた肺病が癒り切てゐない。十四の年から取ついた病魔が、折にふれては彼女を難ます。肺病の人が妊娠すれば命を奪はれると云ふではないか。

「僕等は結婚は出来ない。そしてしないつもりだ。それなのに僕は僕の告白をした。涼子に僕の戀を容れてくれと願つた。何たる矛盾！と人は云ふ。

然しそれは彼女から拒まれたいからだつた。そう云ふと益々わからなくなるだらう、が、實はかうだ。彼女からはきつぱり拒絶されたら、いさぎよく斷念もすることが出来やう。お互に愛し合つてる間は別れても思ひ切れない。

僕の氣象として結果を見なければ承知が出来ない。僕は總ての理論は結果を條件としてのみ認める事が出来る。僕は經驗派です。理論そのまゝに理論を承認する事が出来ない。涼子が家庭の事情から必ず僕を拒むであらうと心のうちに思ひ乍らも現實に拒絶されない間は安心（？）が

出来ない。僕は告白をした、拒まれたい爲に……。あまりに愛せられてゐた彼女の家庭から拒まれる爲に……。」

「公二さん、それはおかしい。」  
と新之助さんがさへぎつた。

「君は涼子さんを愛してる。そしてその愛は神に對する畏敬、父母姉妹に對する親愛、自分より偉い人に對する憧憬の心だと云つてゐた。それなのに……何故今度のやうなことをしたんです。それぢや君はあんなりなエゴイストと云ふものだ、君の理論からゆくと、自分の苦惱から免れる爲に告白をした、なんと云ふことだ。チレンマに立つた彼女がどの位苦しむかをはつきりと知つてゐながら——。それが理想家の君の執るべき唯一の道だつたらうか。」

「新之助さん、僕が悪かつたのです。僕はそれを知つてゐる……知つてゐる……知つてゐながら告白をしたのだ。」

然し決して涼子が憎いからではないんだ。苦しめやうなんてそんな卑怯な心は微塵もない。たゞ苦しまぎれにやつたんだ……。僕はあの時告白をしなかつたなら、どんな事をしたか知れやしない。死！ それも恐ろしかつた。そして告白が唯一の薬だと思つたんだ。が、その薬がまだ呑み切れないうちに僕は悔い初めた。涼子が可愛想だ。おれは獨りで部屋の内凝つとしてゐられなくなつたから、君にあひに来たんだ。如何したら可か……」

「公二さん、それは君がね、自分の作つた縄で自分を繋るといふ奴さ、商鞅と同じ運命に陥入つたのさ。」

戀を單なる愛——精神上の——聖く麗はしい憧憬の念と思つてた。それが君の持論だつた。そして君は肉を却けた。戀に肉は不必要である。ところがそう問屋はうまくおろさないさ。君は自分の説を貫く事が出来なくなつた。そして節を折つて告白した、肉を求めた……」

「否、否、新之助さん、それはちがふ、そんな事。僕には肉は不必要だ。たゞ告白をすれば自分の重荷が軽くなれると思ひ違つて……」

「いつまで何を云つて居るのだ。もうよし給へ、つまりあまりに高尚過ぎる自説に服従出来なくなつたんぢやないか。世間的戀の前に降伏したのだ。」

公二さんは耳にも入れず、

「さうだ、涼子さんはどんなに悲しむでるであらふ。おれにはそれが堪

えられない。謝罪に行かう。行かなくつちやならない……」

「公二さん、君はどこまでお目出度く出来上つてるんだい。謝罪に行く——誰に？ 馬鹿なことを云ふもんぢやない。涼子さんにあやまる前に、先づ自分自身にあやまり給へ。今まで間違つた説を守つて頑張つてゐた事を。」

「さうかなア。」

柔順にしかし浮の空に引き据られた公二さんは抑へがたい惱ましさに思はず掌を額へ持つてゆき乍ら、顔をあわれに引き歪めました。

## 六一

終に最後の日は来ました。霹靂ど打つて公二さんの耳に雷霆と響きま

した。来るべき日は遂に來らねばならぬと、薄氷を踏むが如き思ひでどれ程これを待つてゐたでせう。

私の可愛いへピーさん。

お母様が病院からお歸りになるのですつて。あんまりお菓子をおねだりしてお腹を損してはいけませんよ。

私は貴君のお手紙を一字残らず讀みました。私は悲しい、此様な貴君の本心を知つたからです。

可愛いへピーさん、私は無邪氣なあなたを愛します、そして永久に愛したい。然しあなたのほんとうの心を知つた今は、わたしとあなたとの間に怪しい隔てが出来ました。私は今迄と同じ心を以つてあなたに對する事が出来なくなりました。それがかなしい。あなたが

さうしたのです。

あなたはゲーテの「ウエルテルの悲しみ」をおよみになつた事がありますか。私の今の境遇は恰度ロツテそれ自身です。私自身は彼女の美しさはない。けれど最早定められた運命に従ふの外ないのですもの。

お庭の山茶花が白く咲きました。私はあなたのお好きなあの花を見るにつけてもたゞ無心の昔が思はれて慕はしうございます。そして悲しい。

お友達は修學旅行に箱根へまわりました。私は書齋でまる一週間といふものを思索にふける事が出来ました。あなたにお返事する事が出来ました。

お正月にはお妹さまと是非お遊びにいらして下さい。

あなたの涼子より

ペビー坊様

かねて期したる事ながら公二さんは、氣も絶々になつて半時ばかりは仰のけに打倒れたまゝで居りました。

ロツテはウエルテルをすてなければならなかつた。否、ウエルテルはロツテを思ひ切つて死ななければならなかつた。アルベルトがある限りは。それも明白にロツテから拒けられなかつたウエルテルはどれほど自れと自れを苦めたであらう。ロツテに「わたくしには歴としたアルベルトさんがありますから、お氣の毒ですが貴君には。」とことわれるウエルテルよ、若い男は幸であらうか不幸であらうか。

彼女は初めからおれをベビー坊と呼んでゐた。そして全でベビーの様に可愛らしい人だと思つて交際してゐた。然し無邪氣なベビーと思はれてゐた若い男は、ウエルテルの悲しみに身を殺さねばならぬ程難むのであつた。遂に堪かねて最後の告白をしたのである。

三月以來通じよかすと努めた誠心は遂にロツテには通じなかつたのだと彼女は云ふけれども果して如何かしら、ロツテはそうと知りながらウエルテルの感情を弄したのではあるまいか。お正月には遊びにいらつしやいと。彼女はアルベルトとの仲を見せつける爲か。いくらお人よしのベビーさんでも……公二さんは子供の様に大聲をあげて、頭髪を掻きむしつて泣き喚きたうございました。

けれどもよく自分の未來を思ひ母上を思ふときに、徒らに失戀に泣く

ことは出来ませんでした。公二さんはむつくと起きて、今一度最後の手紙を書くべく決心しました。

## 六二

公二さんは長い手紙を書きました。東寮二番の頃の生活から北海道の旅行、さては三四月以來九月迄の経過を委しく記して最後に、われは君をわすれじ。人は申します、戀は性慾と相伴はねばならぬ。戀の目的、結果は同棲であらねばならぬ、結婚であらねばならぬ、然らずんばそれは遊戯的であると。

然し私は思ふ、戀の爲の戀、それは存在せぬものではない。私は一度貴女が既に夫となるべき人がある身であるといふ事をきいて、非常に悲し



く思つた。然し私はもつと貴女の心身を占有しやうと云ふ考へは持つて居なかつた。だから貴女があなたの夫となるべき方と結婚なさる事を私は少しも羨しく思はぬ、むしろ貴女の幸福を願ふのです。たゞ私は貴女を戀する事をやめないばかりです、と書き加へかけて筆を投げました。

満一ケ年の追憶は灰色、紫、紅の糸も綾と織り出され種々の模様となつて頭腦を眩惑させます。自分の出様が今少し早かつたら、——せめて高等學校の一年頃から彼女を征服することに力めたなら……とも思ひますが、然し公二さんが馬力を出し初めた頃には、彼女ははや許婚の後であつたと人は申します。よくはわかりませんが、夫人の言葉つきやらその態度から推して考へて見ると、成る程左様だつたかとも思

ひあたります。それにしても涼子さんは、あの時分から人の心をよく知つてゐるくせに、知つて、おれを弄したのか、女と云ふものは實にわれわれの到底敵する事の出来ぬものだ、と太息を吐きました。

### 六三

けれどもその後涼子さんから泉子さんにあてられた手紙の一節こそ、また公二さんの心を新らしく攪亂すものでありました。

私ほんとうにくうれしくてたまりません。昨日小森先生からお兄様の御近況を伺ひましたの、宣教師のステツシユ様も大變ほめてゐらつしやいました。あの方はきつと熱心な信者になられるでせう、神様からよほど恵まれた方だと思ひますつて。何卒これからは明る

い道におたどり下さいまし、私の心から御願ひいたします。さうすればこんなうれしいことはございません。あなたの御兄様はお母様がお好きでございます。その大すきなお母様に御心配をおかけしないのが第一でございます。もし御兄様が生涯神の御導きによつて正しい道におすゝみ遊ばしたなら、御本人ばかりではなく皆々様まで御幸福だと存じます。どうぞいたらぬ私の言葉でございますけれど、おきゝ下さいましたなら私の限りなきよろこびでございます。私はこの頃こんな事思つて居りますの。生意氣なこと申して御笑ひにならないで下さいまし。でもこれから散々苦しんでと思ひますの、十字架を負つてけはしい路をたどりませんでは。

どうぞこの旨お兄さまによろしく御傳へ願います。

涼子様はどうなすつたんでせう、こんな事を、と不審さうに泉子さんから其文を見せられたとき、公二さんの胸はどれほどひどく波立つたでせう、斷乎たる絶交状をこそ豫期してゐたものを！人の好い人間はすべて物事を好意的にのみ解します。彼女は正しく戀以上の大いなる愛によつて自分を救はんとしてゐるのである、と公二さんは更に感激と發奮の涙に咽ばざるを得ませんでした。

## 六四

その以前から公二さんのお兄様はお父様と意見が合はずに、いろいろな事情から家を出て下宿屋の二階に轉がつてゐました。そして心の淋し

さや憂悶をまぎらす爲に、はかない生き方をして居られました。彼奴、酔ひどれめ、秀才の末路、こんな蔭口も聞えて、長上、恩師、先輩の間の評判は甚だよくありませんでした。

公二さんはそれが悲しうございました。でこの頃の自分にはお兄様の立場がだん／＼理解されて来るのでした。抑へ得ぬ胸の悩みや痛恨をかゝす爲には心にもない行爲や、自己を欺いて空虚な生活をも敢てして行かねばならぬ人達に同情の涙を惜しむべきではない。

僅に自分の不平、不満、反抗の念を満足させる爲に、親の情同胞の愛をもすて、世間と云ふやつの批評も顧る暇のない……敗殘の兒に今は自分をも見出しさうだ。

どうもしなければ気が狂ひさうなんだ？ 何と云ふ不甲斐なさなん

だ！

けれども公二さんは自分のそんな考へを、老いたまへる母君の前に晒け出すには堪えられませんでした。自分は母の心配の種となるとも力になる事が出来ぬ、と落涙しました。が、駄目でした。断然自分も家を出やう！

さう思ひ定め乍らもまだぐづ／＼と決行しかねてゐるところへ、孝さんから葉書が来ました。かねてさう云ふ心當りがあつたらばと頼んでおいたからでした。

公二さん。

私は貴兄に氣持のよい部屋を見つけたのです。それは四谷見附に近い、ある大きな奥深い洋館の一室です。持主はカトリックの宣教師

です。何でも眞面目な人に貸して上げたい、——殊に帝大生にとの事ですから、私は今の貴兄にはあの僧院の生活が最もふさはしいではなからうかと一寸思ひつきましたのでおしらせ致します。これに定めやう、と飛び上つてすぐ公二さんは交渉に出かけました。

## 六五

最初この別居問題についてお友達はみんな云ひました、止せ！と。然しかうと思ひ立つた事は結果を見ないでは承知の出来ぬもの、そう云はれると獨更やつてみたくなる。

妹が可哀想ぢやないかと新ちやんは云つてくれました。成る程さうだこんな事情から兄貴達がみんな居なくなつたら、可憐な妹たちはどれ程

心細く情なく思ふだらう、と思ひ返しても見ましたが、矢張り駄目だ、どうせ兄と妹は決して一致することの出来ぬ運命をもつてゐる。お互の腕裡を少しも解せず傍に居たからと云つて何になる、と斷然思ひ切つて僧院へ移ることにしてしまひました。

初めの程は何となく落ちつきがなくなつて朝も早く眼がさめ、勉強も出来ませんでしたが、一日二日と経つにつれて非常に居心地がよく、それは雑風景な一高の自治寮の比ではありませんでした。緑色の卓掛や白塗の本立の配置もよく、青い海と髪の長い女の繪額をかけたリ、ペイズに眞紅な花を挿したり、アポロの裸體像を飾つたり。來訪の友人達はびつくりして、

「アーヴ、ゼット、コンム、アンブランスダン、ヴォートル、シャンブ

ル、ネスパー（まるで皇子さまの様だ）と叫びました。公二さんも内心得意で、いろいろ装飾品の置きかへに苦心したりしました。

が、直きにそんな事もつまらなくなりました。用事があつてたまく歸郷する度に泉子さんは、お兄さま泊つてらつしやいなとせがむ。マントの袖に取りついて甘へる。お千賀さんはお千賀さんで晚餐だけでも引きとめて、効々しい心づくしのお手料理が暖い茶の間の團欒の卓上に並べられる時など、おれだつてどれ程のたからう、と落涙するほど心弱くなつてゐる公二さんは、わざと強面でしりぞけました。それがせめてもの果敢ない虚勢なのでありました。

そのくせ僧院に歸ると寂しさに堪えられずなつて、救ひでも求めるや

うに卓上に打伏して、泉子さんの名を呼ぶこともありました。

「泉ちゃん、僕は矢張りお前が一番可愛いよ。戀人もいらぬ、女友達もね。二人は仲よく暮して行かう。戀なんかもうしたくない、いや出来さうもない。しかしその妹もやがては人手に奪はれなければならぬ。」

## 六六

公二さんは日々四谷見附から甲武線の電車で通學しました。それが計らずも涼子さんに遇はせる機会をつくりました。

花電車などと呼ばれて青春の男女學生を溢るゝばかり載せてゐるこの電車は、朝は殊に見附邊で混み合ふ。そうして毎日乗降する人は大抵

まつてゐます。場所も時刻も。女では三輪田、雙葉、跡見、お茶の水、佛英和、男では帝大、早稻田、高商、一高！その中に公二さんも涼子さんも交つてゐました。

初めての朝でした。何心なく乗込まうとした公二さんは、チラと車内に涼子さんを見つけてました。焦茶色の毛皮のボア、渦巻模様の紫路仙の羽織。はつとたぢろいで立ちすくんだ瞬間、全身の血が逆流するばかりの面眩さと憎さの念がむら／＼こみ上げたのであります。はたと視線の衝突した涼子さんは、あわてて面を伏せました。

公二さんは胸の鼓動の烈しさに、暫時は四邊が眞暗になりました。ただ辛うじて柱に倚つて立つてゐることが出来ました。無論その電車はやり過してしまひました。

彼日の會見こそ最後の日よ。われはソリチュードの生活に入りてひたすら學びの道に身を委ぬべきぞかし、われはただ彼女に劣らざるやう心がくべし。最早彼女を見、その父を見、母を見。若しわれにして彼女の家門に訪ふことあらば、これわが最後の日よ。否、死すともまた何をか彼女に云はんや！かうしたけなげな決心はたつた一度の涼子さんの出現によつて破られました。

歸途にもまた、成るべく圖書館で時間を過すやうにしても、丁度涼子さんがいろ／＼なお稽古をすまして水道橋から電車に乗るのは、もう灯のちら／＼點きはじめる頃なので、よく同じ車に乗り合せてしまふ。そんな場合公二さんは男子としての禮を欠くことを恐れて常に挨拶だけはしました。そして冷汗が腋の下に湧きました。涼子さんはいつも恥かし

げに顔を染めて、お友達の間から會釋を返します。

最初のうちはそれが非常に恐ろしいございました。四谷は附で下りるともう後も振り向かず、物にでも追はれた様に一散に石段を馳け上つてしまふ。

然し次第に馴れて公二さんはこの事に興味を持つて來ました。どうかして涼子さんを見なかつた日は、苛々と物足らなさに堪らなくなりまして。不可抗の力にでも引きずられるやうに、自然と足はそちらへ吸ひつけられてしまふ。どうしてもその引力から免れることが出來ませむ。よしつ、自分は毎日彼女を見やう、と力み返りました。

時にはメートレスとつれ立つて歸る涼子さんの姿を見出すこともあります。折柄の西陽がラヂアンな光りをその美しい面輪に投げますと、青

春の血潮はくわつと双頬に上つて、そこに生の悦び躍つてるやうに見えます。その傍にグレーな先生の貌がさも若い女に向つて、そんなシャルマントな風をしてはいけませんと云つてる様で、公二さんにはそれが癢に障りました。貴女は若い間に戀と云ふものを味ふた事がないのですか？ つて訊きたい程に思はれました。涼子さんは公二さんの横顔を恐るくちつと見つめます。公二さんは面をそむけて勝誇つた風にペーヴメントの上をあちこち歩を移す、憎いほどおちついて。そんな場合の氣持——實になんと形容してよいかわかりません。

## 六七

僕は君が寂しいだらうと思ひます、と云つて友人達はよく慰藉や激勵

の手紙を寄せました。公二さんはその友情が身に泌みてうれしく、今までよくみんなおれに愛想をつかさなかつた、と今更の様に耻ぢました。自分は毎日涼子さんのことばかり思ひつめてゐた時分、みんなの厚い深切に對してどんな態度を執つたかと思ひますと……。

孝さんからはこんな事を云つてまゐりました。

近頃は君と顔を合せる機もなかつた。多分朝から晩まで圖書館の内  
でフランスの小説を讀んでゐた事と思ふ。ユーゴのノートルダム  
ドバリは如何でした。

それでもどちらつかずにぶら／＼してゐる私、家の人達にも全く信用  
を失つて終つた自分を省みて、内心君が羨ましい。

君も案外悲しいことを云ふ。淋しさは戀の常素である。われ獨りな

りと思へば力強くもなりません。われ二人なりと思へば悲しさ寂し  
さがついて來るのは初めからの覺悟ですもの。然しその淋しさ、悲  
しさは單なるものではありません。絶對的のものではない。樂し  
い悲しさ、華やかな寂しさである。それはサロメの口に塗れた苦味  
です、その苦味の中に麗はしい光りを認め今それにバツカスの歌を  
高唱しつゝ進まふとして居られるのです。裏切られる恐れがある？  
然しそのときこそ私達は眞の孤獨といふ事を自認し自確し得るもの  
と思ふ。そして勿論反抗の心が他所から侵入して來ます。それでも  
自暴自棄に陥入るには尙早いと思ひます。私は思ふ、この時こそ私  
達の立脚地をたしかに明かにきめなければならぬ。私共は眞に檢  
められた自分の胸の中に自覺の歎びのコーラスを聞く事が出來ませ



う、そこに信仰が起りませう、永遠に對する憧憬と努力とが生れま  
す。

犠牲！ すべての進化になくてならぬものです。私は美しい牧歌的  
な物語をきいた。

昔、昔、山國に王があつた。黄金と銀の大鐘を造つて山から山へ美  
妙な音響を響かせたい！ 彼れの望みはあまりに大き過ぎた。

鐘の鑄造を仰せ付かつたその國第一の老匠は幾度か失敗した。それ  
が當り前である。が、王は怒つた。これが最後の試みぢやぞよ。

鑄物師は覺悟をした。

鑄物師に一人の娘があつた。年は十六、美しかった。神にお祈りを  
献げた。神の御告は「そなたの死によつて……」とあつた。神様も

悪戯好きな奴さ、昔から人身御供といふときつと美女だ。美人を嫌  
ひなものはないと見える。

最後の試みの日は来た。とろ／＼する黄金の液、老匠は震へる手か  
ら銀の溶爐にそれを流し入れた瞬間、娘は身を躍らして飛び込んで  
溶爐の中に溶けて死んだ。

美事に鐘は出来上つた。音は玲瓏として山から山に響き渡つた。鐘  
は美事に出来上つた。

犠牲はすべてに免れがたい。それは進化の要素である。我等はその  
結果を汲み取る事を忘れてはならぬ。

夢の様な三年の生活、その間に君から貰つた手紙、涼子さんとの戀  
の紀念の手紙を私はすべて焼き棄てやう。

その煙よ、重き戀の荷を背負ふたかるい薄紫の煙よ。さらば！

孝　よ　り

公　さ　ん

## 六八

女の子は十六七になると餘程注意せねばならぬとある先輩が云ひました。なるほど乙女の羞恥と云ふものは年とるに従つて一枚一枚紙をはがすやうに薄れてゆくものらしい。そして微妙な初々しい心はなくなつてむしろ異性に近附きたい、自分の可弱い力で男を捕えたいと云ふ様な一種の好奇心が出てくるものらしい、と公二さんは思ひました。

あなたはお麗さんが好きでせう、家のお姉さんがさう云つてよ、とま

だ十になつたばかりの小雪ちやんが云ふ。公二さんは驚いて雪ちやんの顔を見ました。そのお姉さまと云ふ君子さんも未だやつと今年女學校の三年生で十六なのであります。女の子と云ふものは表面ではあたし男なんか……といふ様な顔をして、そして密に殊更に注意を拂つてゐるらしい。公二さんは別段これと云つて君子さんと話をした事もありませむ。遇へば君子さんの方から澄ました顔をして他所へ行つてしまふ。しかし先日一高の記念祭のとき、公二さんはお麗さんやそのおかあ様と一緒にありました。そして君子さんにも群集の中で逢ひました。その後公二さんがお麗さんの家へ行きますと、

「ねえ、貴方君子さんの所へ遊びに行く？　あたし君子さんに聞いたら

否、些とも來ませんと云つてましたわ。」

と意味ありさうにじろく見ました。女の子と云ふものはこんなにも嫉妬心の強いものかといやになりました。これを戀の變態と云ふなら公二さんは大變艶福家なわけですけれど、さうまで深い意味はなくつてもまあ一人の男が二人の乙女を知つてるとすると、二人の乙女は相互に、その男の事について何にも知らない様子をやる、しやうと力めるものです。一人の女性の前に二人の男が立つときは、その男達はつとめて自己廣告の競争をやりますが、乙女達はその反對であります。

お麗さんのおかあさまは近頃それとなしに、家の赤ン坊ももう十七になりました、と口癖に云はれますが、公二さんは矢張りまだねんねの様な氣がしてゐました。それでも時々冷汗を流させるやうなことを云ひます。何でも涼子さんのことが餘程氣になつて堪らぬらしい。行く度に涼

子さんの噂が出ます、それによつてどれだけ公二さんの心が虐げられましたか……。

流石の公二さんにも乙女の心裡がうすく解かりかけて來ました。さう考へて見るとこれまでのすべての態度も泣き顔の意味もはつきり解せる。

四月に入つてからの或日、公二さんは孝さんを連れて訪問しました。すると従來白粉氣なしたつたお麗さんの今日は美しくお化粧してゐるのに氣がつかしました。そして珍しく、噂にお挨拶しました。それは孝さんがゐたからかも知れませんが、公二さんはお麗さんが御挨拶なんぞしたのを初めて見たのであります。

「公二さん、うちの赤ン坊もお化粧するやうになりましたよ。」

夫人はお茶をすゝめ乍らいとし想にお麗さんの方を見て微笑みますと  
 あら、ひどいわお母さま!! と上脛を仄紅くして腮を襟にすりつけて俯  
 向く嬌態が、見ちがへるほどつゝましく大人びて見えました。

これは少女が成長する單なる一つの過程に過ぎない——と思ひ乍らも  
 公二さんは、なほ非常に意味あるものゝやうに思はれてならないのでし  
 た。女は己れを愛する者の爲に化粧する……何となく生存競争の悲哀と  
 云ふことを感じさせられます。今迄は温室の裡に育くまれた花も、これ  
 からは飾窓をかざる一鉢となつて競争場裡に出なければならぬ。  
 しかも装ひのなつた乙女はもう今までのやうに打ちくつろぎませむ。  
 何故か近頃急に公二さんに對してまで「あたし知らないわ。」と云ふ様な  
 風ばかり見せる。しつかり擲んでた指の透間からするゝと砂の漏つて

ゆくやうな寂しみを、公二さんはどうすることも出来ませんでした。

## 六九

だん／＼學校の方が忙しくなつたので、戀なんかしてゐる暇がない。  
 うそだらうと云ふ人もあるかも知れぬが事實だから仕方がない。世の中  
 がせち辛くなるのも無理はない。否、世の中がせち辛いからかも知れぬ  
 おれは全く思想と云ふものから遠ざかつた。教科書以外に本一冊讀まぬ。  
 朝起きてから寝るまでノート専心だ。そしてそれが面白いのだから猶面  
 白い。

大學に入るといやに俗化するねと人は口をそろへて云ふ。それでなく  
 ては駄目だ、おれ達は今まで麗らかな日林の中を詩集手にして歩めば、

美しい乙女が微笑んで寄つて来る。二人は相擁く、そして戀におちると云ふ様な甘い夢を見てゐたんだ。そして世の中もその通りと思つてゐたんだ。處が赤門をくいと、林の中を歩いてゐても乙女に會はぬ。會つても乙女は人の手に凭れてゐた。或は妻だの許嫁と云ふ鐵鎖に足をつながれてゐる。また他の乙女はすげなく脊を見せる。すべてがかうだ。

公二さんはさう云つて笑つてゐました。孝さんとても今は盲目的に恵美子さんを戀ひわぶると云ふよりも、少しは批評眼を以つて對手を觀賞し得る餘裕が出来。

「人は大人になると寂しい。」

など云つたりもしました。

無論公二さんもあれつきり柏木を訪ねませんでした。處が或時突然そ

の令嬢の母なる人が用達の序だといふことで、公二さんの家に立寄られました。公二さんは驚きました。でも挨拶に出ないわけにもゆきませんでした。

が、逢つて見ればなつかしいのは矢張り昔馴染の人でした。公二さんは柏木の庭の長い秋の日や春の宵の過ぎにし方を、思ひ出さずにはゐられませんでした。然し夫人の艶のよかつた頬はこけて、額には絹糸のやうな細い皺がふえてゐました。年といふものは遠慮容赦なく烙印を皮膚の上におす。けどそれにしては、一年餘の経過にしては、あまりにも衰へ方の烈しいことよ。何か大きな悲痛でも身のまはりを取りかこんででもゐるのでなければ。

夫人はいろく打明話をされました。それで公二さんは、今京都大學

へ入つて居られる御養子の曉さんが、常に夫人の心配の種を蒔いてるんだと云ふ事がわかりました。心一つに思ひあまつて、夫人は此家へ足を向けられたのであります。涼子さんはこの頃病氣勝に暮されてゐるさうです。あまりにもつれない曉さんの仕向けによつて!!

「歴とした許嫁の女がありながら、他の女に心を向けたりするものですから——狭い處女氣の嫉妬からですねえ。」

夫人は情に迫つてそれ以上を云ひつゞけることが出来ませんでした。

涼子さんは懊惱の極、古い胸の痛みさへ覚え出しました。神経が極度に昂まると、やゝ狂的の行爲を免れない様な事までもする。それが聖人の様な父君を悲しませました。夫人は泣くよりほかありませんでした。涼子さんの心は切れない鋸で引かれるやうでしたらう。

「お母さま、この本にね、愛と云ふ字が二十五あつてよ。お父様に知らして上げるわ。」

「いやな涼子ちゃんね、そんな事どうだつてよいぢやないの。」

「いーえ、公二さんが有仰つたこと覚えてゐらつしやるー」

To live is to love

私は愛と云ふ字を澤山數へるんだわよ。」

こんな取止めのない事を口走る。

「私がわるかつたのです。けれどももう七年前から許嫁の間柄ですから

……」

と夫人は手布を眼にあて、

「あんまり曉を甘やかしたのが却つて毒になりました。今の様な有様で

は行く末が思はれます。どつちが早く死ぬでせう、涼子は早く死にたいと云つてゐます。乃木さんみたいに私の家は断絶して終へば後に心残りはありませんが、娘を残して死ぬ事は出来ません。それが悲しい。」

と身を震はしてお泣きになります。

公二さんは心の底から苦しい吐息が出ました。夫人の前にひれ伏しました。

「僕は涼子さんに謝罪せねばなりません。涼子さんの氣に障るやうなことを耳に入れなければよかつたんです。どうぞ許して下さい。」

「否、いつかのお手紙のことですか。あんな事は若い人には有勝のことです。それに涼子と私との外には誰も知る人もないんですし、實のところ涼子も貴方をお慕ひ申してゐましたのです。が、何しろ七年前か

らの許嫁がありましたので……どうぞあれの身の程も思ひやつて下さい。夫とせねばならぬ男からは——肺病の娘なんか——おれはお前の犠牲にならねばならないんだぞ。と云はぬばかりの勝手氣儘な待遇をうけます。まるで小説にでもある事そのまゝの様です。私は貴方だけが便りに思はれます。私を母と思つて、この後も力になつて下さい。

ねえ——そして遊びに来て下さい。」

公二さんは固く腕ぐみをしたまゝでありました。

夫人は夜に入つてから歸られました。公二さんは護衛の爲に柏木まで送つてゆきました。一年あまり足踏せなかつた門を喪家の犬の如くに従つて這入つた玄關の瓦斯燈の眩しさ。思はず面を伏せたとたんに頭上から涼子さんの、

「ア、まあ如何したの……」

と緊張しきつた聲。公二さんははつとして血の循環も一時にとまつた様な気がしました。不動の姿勢で佇立したつきり……黙つておました。涼子さんは意外の表情……だらうと公二さんは思ひました。もう仰ぎ見る勇氣はありませんでした。

晩くもあるし公二さんはお支關先から直ぐ歸りました。後日の來訪を約して!!

## 七〇

あんまり晴れて頭痛のしさうな好い秋日和、青々と澄み渡つた空に赤蜻蛉飛び交ふ長閑な午後を、公二さんは柏木の里に出ました。

黄ばむだ木の葉が門口に堆かく掃き寄せられて、その中からふすくと薄い煙が立ちのぼる。門内を覗き込むと、植木屋さんがしきりとちよき〜やつておました。間毎間毎の障子の紙の白いのが、松の葉越しにちら〜と、小春とは云ひながら流石に木々の梢渡る風はうら寂しい。令嬢を慕つての訪問毎に恐ろしい〜と思つて氣のおかれた父なる博士も、この後は決して恐ろしくはないと心に決めました。妙なものと公二さんは思ひました。良心にやましい點やわだかまりのある時は、非常に恐怖心を抱いて妙に長上の人を懼れるものですけど、些の野心をも包藏しない今の身の上には憚らねばならぬ何物もないのがうれしい勝利のやうに感ぜられました。そしてこの誇りを潰すことの痛はしきは公二さんは這入りかけた踵を急に返して駒込へ出て、お麗さんの家へゆきま



した。御大典を前に控えてるので、どの街でも大掃除にいそがしい時節でした。疊を打つ音がこだまを返して響いて来る。

お麗さんはお不在でした。

「まあ、お兄さまの方かと思つた。すつかり顔を忘れて了つた位！ お久しぶりですねえ。」

夫人はいそしと内庭に面したいいつもの九疊のお座敷へ通して下さいましたけれど、此家へもすつかり御無沙汰に打過ぎてゐた月日が、公二さんとみんなの間に隔の垣を造りました。何やら物足らなくつて仕方がない。秋の陽はかん／＼照つて、てらく／＼と拭き込んだ縁側が燃えるやうに熱く、閑寂の氣の満ち渡つたお庭に、银杏の黄葉がひまなく散る。類に散る。瑠璃色の空を白い雲が、とぎれとぎれに西の方へ流れて！

## 七一

涼子さんの御病氣のことを聞かれて、お母様は有仰いました。あまり柏木へは行かぬ方がいゝ、同情といふものは理智を盲目にする。感情に走ると飛んだことになるから、と。しかし公二さんはそんな言に従つては居られませんでした。

そしてそれは非常に寒い秋雨の日でした。庭の花壇なんかすつかりすがれて、芙蓉の坊主がカラ／＼と風に鳴つてゐました。兎も角も一年ぶり、二人は再び公然と相會ふ機會を得ました。

意久地なしめ、曾て自分を拒絶した女の面前に何の面目あつて出る、と人は云ふだらうと、公二さんは内心忸怩たらざるを得ませんでした。

然し、然し自分はたしかに拒絶されたとしても、自分の彼女に對する好意の減ずるわけがない。單なる男の意地といふ狭い見地に立つて彼女を憎むことは出来ない。と自分で自分に辯解しました。涼子さんは少しやつれて更けたやうではありますけれど、桃の花の様な頬の色、凸起した眸を持った小猫の様な眼、豊かな黒髪!! その美しさは昔にもまして、輝りとのふて居りました。

「涼子さん、僕は僕のおの告白によつて貴女が怒りもし、かつ少なからず難まされもした事と思ひます。僕は自分のした事が道徳に背いた事であるとは思はない。寧ろ青年の取るべき當然の手段を取つたのである。僕はあの事については決して誰人にも羞ぢ恐れる事はない。然し……」

「それは私だつて若い人の取るべき第一歩だと思つてゐます。私は如何して貴方をわるく思ふ事が出来ませう——私たち母娘はいつも貴方のお噂をして居ましたわ、貴方の様な方をお子に持つた貴方のお母様が羨ましいつて。」

「何卒お世辭だけはよして下さい。それが僕は一番嫌ひです。殊に貴女の許嫁の方の前で僕の事を褒めるのはよして下さい。それは一種の罪悪です、人を若しめて喜ぶといふものです。」

「まあ酷いわ、それどころか私は始終貴方の事について心配して……だつて私のはしたない御返事が貴方を怒らした。いゝえ、それは確ですもの。途中で見れば厭な顔してお顔して逃げる、電車で遇へばお尻を向ける、少しも訪ねて下さらない。私はどんなに辛かつたでせう。」

第一貴方が一番愛するお母様をすて、お家を出られたと聞いたとき、私は如何してよいか全く知りませんでした。貴方の将来は私の手紙一本で左右して終つた。——眠られぬ夜を幾つかこねました。貴方には棄てられ、貴方のお母様からは怨まれる。私はすべての成行を神様の御心一つに委せました。

それでも貴方がより清い心を育くみ乍ら、健やかな身體をもつて純潔な生活をして居なさる事をさる方から承つて、私は貴方に感謝しました。神様は人を見殺しにはなさいませんでしたわ。

それから私の心はのんびりとして、常に春にあるやうでした。』

「それです、それです。それは僕も同様です。ですから今日僕は自分の恥を恥とも思はず、わざ／＼伺つたのですよ。僕は背徳な事はしない。

動機は純潔だつた、然し結果といふものに對して僕は盲目でした。僕の中の態度が貴女を苦めしやしないか——僕の胸にこの考へが蟠まつてゐた。僕は自分の愛する人に苦痛を與へる事を知り乍ら黙つてる事は出来ない。然し拒まれた男が女の前に出るといふ事——謝罪に——は容易な事ではない。貴女は會つて呉れぬであらう、僕は今迄幾度か伺ひ度かつた。が、この故障が許さなかつたのです。』

「公二さん、何卒もう何にも有仰らないで下さい。私は古傷に觸られる様な氣がします。』

「然し僕としては……殊に貴女の御病氣と許婚との關係についてお母さまから承つたとき、貴女にお詫をし、貴女に感謝する事の出来る機會はこの外にないと思つたのです。

僕が先晩お母様を御送り申してこの玄關を入らねばならなかつたとき、そして明るい瓦斯燈の下で貴女の貌を見ねばならなかつたとき、僕の足はすくんで了つた。舌が硬ばつて何にも云ふ事が出来なかつた。今日だつてひよろめく足を踏みしめながらこのお部屋まで来る間に、僕の肉體と精神とは極度に疲労した。泣くにも涙が出ないので、僅に狂的な笑ひが途方もない時に迷るのです。」

「否、否、お詫だなんて、それは私の云ふ事です。けれど、けれどそんな事はみんな忘れて、そして兄妹として清いお交際をして戴きたいのですわ。私は誰人にも憚らずに申します。私は貴方のどんな行爲について、決して悪意を持つてないんです、むしろ愛するとも。」

両手に顔をおほふたまゝ、涼子さんはきつぱり申しました。女と云ふ

ものが或場合には男よりも大膽なものであると云ふ事實を、公二さんは確りと突きつけられてたゞしくとなりました。

かくて兩人の間には漸と昔の親みのこぐちが解けかゝつて來ました。

「ペピーさん、お嫁さんをもらつては如何？ 私ね、見つけるわ。」

「僕ですか、まあよしませう。もう結婚なんかしたくありません。」

「まア可笑しい。結婚なんかもうしないつて！ 一度くらゐした事があるんですか。そんな事云はずとマ、の云ふことをおききなさいな。ねえ、貴方の理想は？」

小首を傾げる可哀さ。公二さんはまたく悲しくなつて、胸元からぐつと痛いやうなかたまりがこみ上げました。

「貴女です。涼子さん、桃割に結つて奇麗な半襟をかけた、日本式の美

人でなければ……」

「えい、貴方が好きだから今朝これに結つたのよ。」

鬘の邊へ手をやつて、被ぐやうに襟脚を撫でると、得も知れの芳香がばつと緋ぢりめんの袖口からこぼれました。

## 七二

その新春はインフルエンザが非常に流行して、柏木の里の一家もどつと病床の人になられました。公二さんは博士から頼まれた用事があつたのでその返事をもたらしして訪問したとき、博士だけは起きて居られました。他の方々には會ふことが出来ませんでした。

そこで公二さんは諸處の店頭をさがしまはつてマリアの美しい繪端書を求め、早速御見舞を書いて出しました。

ところが御養子の曉さんも丁度歸省して居られました。そこへ公二さんからの繪端書がとどいたのでありました。

公二さんは何の氣もなく學校から歸ると、一枚の葉書が机の上に待つておりました。差出人は涼子さんと曉さんの連名でした。

これからは決して柏木へは來て下さるな。あなたの葉書によるとあとで遊びに来るとの事なれどそれはよして呉れ。心配する人は外に澤山あるからゆめく無用。

公二さんはこの非常識な文句を讀むであきれました。淺ましいやうな悲しいやうな曉さんが惘然なやうな氣がいたしました。馬鹿々々しくつて怒れもしませんでした。なほまだ最後につけ加へてありました。「これ

は私ばかりの考へではない。家族一同の希望である。」と、先達訪ねたときも夫人は、貴方を他人とは思ひません。いやでせうが未長く相談相手になつて下さい。今までのことはお互に水に流して、としみつゝ云はれた。

それをお世辭とは思はないし、曉さんが嫉妬に驅られてむしやくしやまぎれにこんな手段をとつたのだ、とは知れてゐながら、若い青年氣の一筋に、考へれば考へるほど、上もないこの侮辱には堪えられませんでした。終にその葉書をつかんで、柏木へ出かけて行きました。それは暗雲が低く徂來する寂しい夕方でした。

夫人はちつと公二さんの云ふ言をきいてゐました。そしてただ、「頼りない私を可哀想だと思つたら時々遊びに来て下さい。それでも

いやと有仰るなら仕方がありませんが、何卒そんな事を云はないで……。」

「否、奥さん、いくらお人よしの僕だつてこれには少々堪えられなくなります。僕は貴女方の平和を亂す爲に深切ではなかつたつもりです。それは御存知でせうが！しかし仕方がない曉君に疑をかけたのも僕の不徳の至すところですから——最早お宅へは上りませんから。いつまでも痛くない腹をさぐられてゐては、僕にしたところがこんなつまらない事はありません。然し決して貴女方に對して悪意を持つ所か、常に感謝の心を以つて永久の平和を願つてゐます。これだけを御記憶願ひたいのです。」

夫人は蒼ざめた面を上げて、承知したと有仰いました。

「ですが奥さん、この事件は涼子さんに黙つてゐて下さい、餘計な心配をかける爲に僕は来たのではないんですから。」

けれどその間にもう涼子さんは出て来て傍に座りました。いつもの通り匂やかな笑を浮べて嬌へるやうに挨拶する。公二さんはだまつて頭だけ下げました。夫人の話によると病氣も大分重かつたとの事でしたが、さしてそんな様にも見えぬ。よくは見ませんでした。公二さんは自分があまりに馬鹿々々しい煩悶をしたやうな氣が致しました。惻巧な涼子さんは忽ち理由ありげなこの場の様子を直覺しました。

「お母さま、なあに。公二さんが變な貌してるんぢやあないの。喧嘩なすつたの……いけないお母さまね。公二さん、かまはないからうんと甘へてお上げなさいな。あなたはお母さまのお可愛がりぢやないの。」

二人を見くらべて云ふ。公二さんは傍を向いてしまひました。

「公二さんてばひどいぢやないの。私にばかりおしやべりさせて……お母さま、一體どうあそばしたのよ。え？」

公二さんはせわしく目瞬いて、云ふなどの意味を夫人に目くばせしました。

「あら、いゝぢやないの。公二さん、よ、どうしたのよ。そんな陰氣な貌をしないで！ さア、召し上れよ。私いま剃きくして上げるわねえこのベビーはほんとに世話の焼ける事ねえ。」

と涼子さんは手づから蜜柑の皮をむいて呉れました。纖い指先につまんでさしつけて、

「さア召し上れ。でなければお口へおしこめてよ。」

公二さんはそれをも拒む勇氣はありませんでした。が、食べやうとも思はれない。だまつて手に受けて眺めました。と、冷い蜜柑の薄皮に涼子さんのデリーシアスな皮膚の暖みが残つてるやうな氣がして、握りしめたくございました。

でも公二さんは強情に、口を利きませんでした。涼子さんは終に泣きさうな顔をして、私がおてわけるければ行つてしまひます、と出て行つて了ひました。それを機に公二さんはすぐに立ち上つて暇をつげました。恰ど雨がどしやぶりに降つて來ましたので、傘をとすゝめられるのも無理やりに却けて歸らうとしましたが、まさかにそれは禮儀が許しませむ。止むを得ずに借りて玄關を出やうとすると、また涼子さんが衝立の蔭にちらりと姿を見せました。ふり返つた公二さんは、

『御身體をお大切に……。』

僅にこれだけ云ひました。そして何にも知らない小間使の花ややなんかが、公二さんの様子がいつもとちがつて可笑しいと云つて笑ふのを、他事のやうに聞き流し乍ら傘にかくれて門を出ました。雨は益々ふりしきる、電が方々で光る、物凄い夜になりました。

## 七三

それからまた一年の月日の経過したところが、目下の公二さんの状態でありました。

公二さんもだん／＼おちついて來ました。もう時は過ぎたのであります。過ぎ去つた事に逡巡して徒らに哀傷の聲を漏らすセンチメンタリ



ストであつてはならない。花散り失せし後は青葉の蔭に健實な果を結ばねばなりません。さまざまの現實は一時におしよせて來てゐます。もう卒業も目の前だし、就職先も定つてゐるし新しい社會もひかへてゐます。種々の分岐點が待伏せて居ります。結婚の問題も御兩親の胸にないとも云へませぬ。

たま〜お家の御用で吉野家へ行つても、もうやるせない悲しさをおどけて茶化して了ふことが出来るやうになりました。あの双の眸でちつと見つめられても。お嬢様には御機嫌でござりまするかな、などと左圍次の太い假聲交りかなんかで。

でも差向ひで一つ手爐なぞに手をかざし合つてると、流石に手持無沙汰になつて黙つたまゝ、無意識のすさびに灰なぞ均らし初めてその上に

火箸の先で幾度となく心、心、心、と書いたりしました。そしてふと顔をあげたとき涼子さんの視線がちつと注がれてありましたので、我にもあらず赧くなつてあわてて灰をかきませやうとしました。

「公二さん、その字を消すのはおよしなさいな。」

涼子さんはかう云つて、急に袂を顔へおしあててヒステリックに泣き出しました。公二さんは吃驚しました。その場を取なす適當な言葉も出て來ませんでした。

公二さんの遠くへ赴任するといふことがきまつてから、涼子さんは一入名残が惜しくなつたらしく、離れともない風情を見せることが度々でした。ともすれば、

「貴方はこれから外國へいらして、好き自由な眞似をなさるんぢやああ

りませんか。そして私なんかの事は忘れておしまひになる。」  
と口癖の様に拗たりしました。

「さうですとも、面白いでさア。親をすて故郷を後にし、失戀の胸を抱いて寂しく世界を放浪するなんぞは。……たゞ一人で、家庭も持たず妻もなく子もなく……それが一番呑氣でせう。いや仕方がないですよ。豈われ敢て孤獨を好まんやですよ。」

涼子さんはいきなり公二さんの手を取つて握りしめました。公二さんの全身の筋肉は或物によつて刺戟され、ビク／＼と蠢動しました。更にまたブル／＼と戦きました。

「公二さん、ゆるしてね。私は罪がふかいんですわ、さぞ私をお怒みなすつたでせうねえ。だけど……だけど……私の胸は……」

「否、決して……決して。あなたがロツテであらねばならぬと聞かされた時、成る程一時は僕だつて悲觀しました。ほんとうに僕は死を思つた。然し貴女の僕に對する深い親切と變らぬ愛が僕を復活させてくれました。僕はあの當時の煩悶を酒によつてか肉によつてか——世間の人の様に——醫さねばならなかつたでせう、もし對手が貴女でなかつたらば。」

僕は實に貴女から僕の妹にあてられた手紙を見て——その時から復活したのです。僕は未來に於て孤獨の生活をしませう。然し僕の心には貴女があります。……」

「公二さん、それは本當ですか……うれしい……うれしい。」  
と猶も力をこめて握りしめました。

「公二さん、私だつて——私だつて苦しかつたんですわ。私は貴方をお慕ひ申して居りました。多分貴方よりも私の方が先きだつたのです。』  
今更泣かれたつてどうなるものぞ、と公二さんは苦しく固く黙てゐました。けれども執れた手を振り拂ふことは出来ませんでした。そればかりか、意氣地なくもピリ／＼震へる。

「公二さん、春でしたわ。麴町のお宅をお訪ねしたとき——私の心を貴方が占領なすつたのは。あの時はお麗さんや女學部へ行つてらした岡野さんやなんかも御一緒でしたわね。』

「え、あの日は僕だつてよう／＼覚えてゐます。午前中にひどい驟雨のあつた日でした、學校の野球部が早稲田にスコンクで破れたその日です。』

「夕方貴方は私と母を四谷見附まで送つて下すつたのね。ほんとうに綺麗な夕方でしたわね。夕靄がしつとりこめて……あの時強い／＼ある物が私の心を奪ひました。忘れることは出来ません。』

「僕はお宅までお供したいと思つたのですが……」

「貴方は四谷見附からお歸りになつてしまふ。私は電車のシートに身を置いた時、熱い／＼涙が湧いてたまりませんでしたの。悲しくて悲しくて——淋しい。理由もないのに……。貴方が何故何處までも送つて来て下さらないんだらうと……。それが怨めしく悲しくて。』

その夜私は眠られませんでしたわ。かういふ事が幾夜か續いたでせう。深い／＼初戀におちたんです、私は貴方を片時も忘れることが出来なかつたのです。それでも貴方はちつともお感じにならなかつた——私

はさう思つてましたの。』

涼子さんは堪え得ず、公二さんの膝に突俯して潜々と泣き入るのでした。

「涼子さん、それは僕だつてどれ程貴女を慕つたことでせう。然し僕の戀の爲に可憐な貴女を悶えさせる事が辛かつたのです、だから僕は我慢してゐました——幾度か告白しやうとしながら。餘りに僕は迂濶でした。』

「はい、その有難いお心はよく後で知つて居ります。私だつて少さい時から形式上は許婚と定つて居りますが……』

公二さんも夢見る様な面貌で涼子さんの肩に唇をおしつけてそつと抱きました。

「別れるのはいやですわ——』

涼子さんは血に餓えた蛇の様に、しつかと公二さんの兩手に絶つて、いよ／＼ちぎれるほど握り緊めます。水の滴れるやうな黒髪から甘い香油の香が酔はせるやうに立ちのぼります。今は堪えられなくなつて公二さんは半ば夢中で涼子さんの頬に、ひしと自分の顔をすりつけました。二人は長い間さうやつたまゝで、口も利かずにゐました。

やがて我に返つて、涼子さんの肩から顔を離れた公二さんは、きつとした眼色に感情の激動と苦悶の色をおしつゝ、み乍ら、何とも云へぬ切なさうな太息を吐きました。もう今は以前の公二さんではありませんからかうなつてくれればそれだけの覺悟と責任感も生じて來ます。涼子さんの心一つによつては、と云ふ氣にもなりました。

けれども涼子さんは頭をふつて、案外にきつぱりと申しました。

「でもね、私の身はね、今の位置からどうにも動ける體ではありません。貴方は最初からこの涼をお手許におつれになれるとはお思ひにならなかつたのでせう、決して／＼そんな考へをお起しになつてはいけません。貴女はほんとうに親不孝です、私の爲に……大切な貴方のお母様の大切なお方を、めちや／＼にしては貴方より私が申譯のりません。よく考へて見て下さい、私がどうなりませう、どうせ／＼忍ぶまゝにはならないんですもの。戀に生きるか世間に従ふかと有仰いけれども何もかも後に見て貴方と一緒に逃れ出たとしても、私の心は戀を殺すより以上の苦しみを持たなければなりませんわ。私はそれよりか美しく詩の様にお別れして行つた方が望みですの。でも、私の心は貴方は

少しも解しては下さらないのでせう。情死なんかを最も美しいと思つてゐる人は、それで満足に思ふでせう。けれど私には神をすてる事は出来ませんもの、良心にそむくのは心苦しい……」

「涼子さん、神だの良心といふものは何であるか知つてゐますか、神といふものは最も精鍊された自我で、良心とは最も眞實な自己ですよ。人が偽らざる生活をしてゆく時に良心の苛責をうける筈のものではない。貴女はまだ自己といふものを欺いてゐますね、でなければ眞の戀の力を感じないかだ。貴女の戀と云ふものは、親や世間と同じ價値、否、それらの物を戀以上に見てゐる。「情死なんか馬鹿々々しい」といふ貴女はまだ虚偽の生活から脱することが出来ないんです。然し何も僕が心中して下さいと言ふのではありませんから御安心なさい。

眞に自覺した人間は世間からどのやうに酷評され、敵視されても少しも煩悶はないのです。貴女はそれが出来ないと言ひますね。

貴女は僕を戀してると云ふ。然し良心がとがめると有仰る。それは虚偽の戀だからだ、一時的の戀であるからだ、浮氣な戀だからだ。

僕は貴女の戀が浮氣であり戯れであるならば、少しも心配する必要はない。が、もし不幸(?)にも貴女の戀が眞實の戀であるとすれば——そして世間の爲に抑へてゐるのだとすれば——非常に心配になる。僕にも責任があるのだから。だから今の内によく考へてもらひたいと思ふ、貴女が戀をすて、結婚して——それで果して幸福であるかどうか一時的でなく親をも安心させる事が出来るか。

女と云ふものは結婚しない間は戀だの愛だの云ふけれど、結婚してし

まへば戀人の甘い接吻の味も忘れてしまふのが常だ、そんな男があつたつけかしらと思ふ位のものだ。だから女は結婚さへすればそれで幸福になれると云ふ説をとれば、貴女なんか少しも心配する事はない。婚禮の夜あけからは全く僕の事を忘れて下さる、それに貴女は未來の夫たるべき人を決して嫌つてゐるのではない。

僕はどうしても貴女が本當に僕を愛して下さるのだとは思へない。たゞもし眞實ならば貴女の將來について大いに考慮せねばならないのです。だからこの問題はよく考へて見て下さい。貴女の偽りのない心に問ふて下さい。「眞實に戀してゐるかどうか」と。

「そのわけは、私の決心がつかないから貴方が奥さんをおもらひになるのにおこまりだと云ふ意味ですか。……」

「申談云つちやいけません。僕のごことは決して心配はいりません。いくら馬鹿だつて男です。ですからお爲ごかしを云ふのはよして下さい。僕は自分の幸福なんかを期待してはゐませんよ、今となつては。」  
 夫人が這入つて來られました。涼子さんは突然鏡臺の前まではね退いて、何氣なく刷毛でポン／＼鼻の先きを打つてゐました。女の心理状態つてかうしたものと、公二さんはつく／＼悲哀と滑稽を同程度に感ぜずには居られませんでした。

甘いお蜜柑をむきながら三人はお火鉢を圓く取巻きました。夫人は近頃公二さんの顔さへ見ると、

「公二さん、貴方は早く御婚禮なさらなければいけませんわ。」  
 と云はれるのでした。けれど公二さんは今日は意地わるく、

「貴女方の爲にですか。僕によつて破壊の恐れのある、貴女方の平和を維持する爲に、僕の精神生活を犠牲にしろと有仰るんですか。」

「まあ公二さん、何と云ふ言を云ひなさるの。私たちは眞に貴方を肉身の様に可愛く思つて、それでこんなおすゝめもするんですよ。」

「成る程言葉は便利なものですわ。然し奥さん、貴女は僕が愛のない女を妻にして、家を外に遊んで歩くやうなことがあつても、それでも氣の毒だとは思つて下さらないんですか。僕は、僕は……」

「公二さん、もうそのお話はよしにませうよ。」

俯向いてゐた涼子さんは悲しさうに面をあげてはらく／＼しました。

「否、僕は云ひます。奥さん、貴女が眞に僕を愛して下さるんなら、何故貴女は僕の愛する唯一の戀人との結婚を許して下さらないんでせう

……」  
 公二さんは逆上て眞紅になつてゐました、爪の先までも。が、涼子さんがこの際なんにも言はずに黙してゐるのを見ると、忽ち悲しくなりました。自分が思ひ切つてこゝまでぶつつかつたならば、涼子さんもキツト共々夫人に願ひするに相違ない、と云ふ心頼みが充分にあつたのでしたのに……。

公二さんは思はず力一杯に頭髪をむしり初めました。後の柱にドシン／＼と音させて後脳部をぶつつけました。

「あら、公二さん、いけませんわ。もうこのお話はよして下さい。後生ですから……」

と云ひ乍ら涼子さんは柔い左右の袖に公二さんの頸を抱きました。

「まあ！ 鏡を御覧なさいな。貴方のその恐ろしい顔と、もちやくの髪の毛を！ さアちつとしてゐらつしやい。」

と自分の胸に搔い抱いたまゝ、桃割の前髪の花櫛をとつて叮嚀に梳きつけました。公二さんの頭髪は艶がよく純黒で、實に鴉の濡羽のやうでした。それをやゝ左勝の英國風に分てゐます。

「奥さん、僕さへ生きてゐなかつたらそれで可んでせう。否、僕が日本にさへ居なかつたら、貴女の目につくところに居なかつたら。——何に、それなら何でもありません。さア、早速箒で掃き出して下さい。然しそれでも僕には、他の女と結婚は出来ません。自分の妻になる人には見す／＼みぢめな生活をさせねばなりませんから——それは罪惡です。」



公二さんは我ながら言葉が過ぎたと思つてハツとしました。が、この場合自分は全然踏みつけにされてるんだ、存在を無視されたんだと思はずには居られません。従つて意地にも反抗の念が勃發せずには居りません。

「奥さん、貴女は何故眞實の事を打ちあけて下さらないんです。御迷惑ならなせ迷惑ですと有仰つて下さらぬのです。蛇の生殺しみたいになつては困ります、生きるに生きられず、死ぬに死なれぬ。不徹底な態度で僕を苦しめるのはやめて下さい。」

もしまた貴女は本當に僕を愛して下さるんなら、僕と涼子さんと結婚させて下さい。それは世間が許さないと云ふんですか！世間がなんです。貴女は甘い物を食べても、世間が甘くないと云へば、甘いと言

つてはいけない、世間に従はねばならないと有仰るんですか。更に食べたものでも口を拭つて、食はない振りをしろと有仰るんですか。虚偽の生活をしろ、自己を欺けと教へるんですか。然し他人を欺くとも眞の自己を欺き終へるでせうか。それは僕には出来ない。それがいけない。そんな妥協的な姑息手段をとるから、後で悲劇が起るんです。人間の心はさう容易に抑へつけておかれるものではありません。『でも今の境遇では、涼子の事は思ひ切つて頂くより仕様が無いのです。私はいち早く貴方をそんな苦しみから救ひ上げたいと、唯そればかり考へてゐるんですよ。どうぞ早く、御夫人をお迎へなすつて頂戴ね。それより以外に總てを眞の幸福に導く道はありません。涼子や私の言葉を容れて下さるのも、貴方の涼子に對する眞の愛ではな

いでせうか。』

『僕はおもうお暇ませう。』

公二さんは涼子さんの顔を見ながら、ついと立ち上りました。玄關へついて出た涼子さんは、オーバーを取つて着せかけ乍ら、

『公二さん！』

公二さんは静に見返しました。涼子さんはくづれるやうに公二さんの肩に凭りかゝつて、またホロ／＼と泣くのでした。公二さんは冷たい沈黙をついてゐました、どうするのを見てやれ！ といふ氣持になつて。

『公二さん。』

返辭がないので涼子さんは、苛々したやうに身悶えて、涙によごれた頬がピク／＼と痙攣してゐます。

『公二さんてば！』

公二さんは何となく涼子さんの態度が癢に障つてたまりませんでしたので、

『奥さん。』

と奥の方を向いて、どなるやうな大聲で呼びました。

涼子さんは突然ぱつとはね退いて、襖の隣まで走りました。

『ザマー見ろ。』

公二さんは心の中でさう叫び乍ら、靴音正しく去りました。

## 七四

公二さんにはどうしても涼子さんの心がわかりませんでした。何の爲

にあんな眞似をするのであらう？ 別れたくないと取絶つて泣くかと思へばすぐその下から、未來の夫にすまないと思ふわ、と云つて一入烈しく泣く。

ある女に、公二さん、女つていふものはいつでも泣けるんですよ、つて笑はれてから、成る程そんなものかなアと思ふやうにもなりましたがしかし涼子さんの場合になると、矢張り普通の女のそれよりも意味のあるやうに思はれてなりません。

そんな事ばかり考へてゐる公二さんは、學校へ出て先生のお講義を完全にノートすることの出来ないのはあたりまへでした。筆記帳は毎日驚くほど不整で誤脱だらけ。孝さんに、

「公二さん、また考へ初めたねえ、オアゾーブランの事を。」

と心配さうに顔を覗き込まれて、

「なアに、さうでもないがね。」

と胡麻化す公二さんは半分泣き笑ひでした。

とうとう或日先輩の岡崎さんの夫人のところへ出かけてゆきました。

岡崎さんの夫人は女學部の専修部を出て、去年結婚したばかりのノヴェアマダム。白い額に分前髪の波打つてゐる、背の高い、印象的なハイカラの快活なひとでした。

公二さんの告へを皆まで聞かず笑つて、

「貴方は弄かはれてるんですわ。」

一も二もなくかう云はれた時には、公二さんは自分の戀人に對して非常な侮辱を加へられたやうな氣がしました。けれども心を静めて、岡崎

夫人のいふことを聞きました。

「公二さん、貴方はあんまり物事を真面目にとり過ぎます。だから女には一時的に可愛がられる、然しうつかりすると弄かされる危険がありますよ。女には先天的にさういふ気分のあるものですからねえ、たゞ單に男の感情を弄そんで楽しんだり、果敢ない慰安を得やうとする……」

「成る程、御尤もです。しかし涼子に限つて……」

「いやですよ、公二さん。貴方もう涼子さんの事はすつかり思ひ切つて結婚おしなさいな。さうして皆さんを安心させてお上げなさいな。」

こゝでもまた同じ様なことを云はれる。公二さんは何の爲に岡崎夫人を訪ねたのかわからなくなつて了ひました。が、活々したこの新家庭の

空気は、公二さんにも心地ようございました。結婚して楽しい生活が出て来るものなら、して見たいとも思はれて來ました。

「それではよろしく願ひませうかなア。」

とまるで十三四の少年が親からお説教を受けた時のやうな心持になつて、頭をかきく降参してしまひました。

「なんだい、馬鹿に話もてるぢやないか。」

御良人の岡崎さんは來客を送り出して、二階から下りて來たついでに差のぞきました。

「え、今ね、公二さんのお嫁さんの御相談をしてるのですよ。」

「なに、君、結婚する氣があるんですか、本當に。それなら候補者もありませんがね。」

其の灰がばらばらと落ちるのもかまはず座り込んで膝をすゝめる。かう話が具體的になつてくると、公二さんは直ぐまた後悔しました。さうして何故おれはかう根底のない確信のない人間だらう、と自分ながら悲しくなりました。

## 七五

涼子さんの手紙やなんかは鈴音も見せられました。そして、

「嫉けるわねえなんて破かれては困りますよ。」

と自暴氣味のやうにわざとはしやいで云ふ公二さんの串談を、

「私はそんな不誠實な心持で、貴方がたを見ては居りません。」

とたしなめるやうにしんみり答へました。實際岡崎夫人の様に一概に

断定してしまふのも、涼子さんに對して氣の毒のやうな氣がしました。はがゆいやうではありますけれど、鈴音はむしろ涼子さんの方に同情を持つて居りました。純粹の乙女心と云ふものは、熱いやうで冷たいもの單純なやうで複雑なもの、と思つて居りますから。理智の發達した女性には殊に考へることも多うございますから。

それに許嫁といふ問題もずるぶる厄介なものでした。公二さん達の戀のいきさつを聞くにつけ、端しなくも鈴音に一つの記憶が新しくよみがへりました。それはいくらか自分に關聯してゐた許嫁事件で、その當時は事もなく思ひすてられてゐたものでしたが、二年ほど前のまだ春淺い如月の頃でした。切に鈴音に面會を求め、未知のうら若い女性がありました。最初こそ、べなく取次に拒絶させましたけれど、二三日つ

て訪なふ人の、あまりにもしほらしく思ひ入つた様子に、ついほだされ  
て逢ひました。

まだあどけない可愛い聲の主は、思つたよりもなほ小さい人で、荒い  
糸織の緋の羽織を着てしよんぼりと座布団の上に座つてゐました。

鈴音は初対面などにはあまり人なつきのいゝ方ではありませんから、  
先方もどぎまぎしてしまつて、しどろもどろの挨拶をしました。途切れ  
〜に袂を膝の上で弄りながら！ 鈴音は別に何の興味も持たないので  
ただはア〜と受け流しつゝ、二人の間の手爐を少しおしやるやうにし  
ながら、冷たく見据て居りました。結び切れない程房々あるその乙女の  
束髪の鬘の邊を……。

やがて一生懸命のやうに顔をあげたその乙女は、さう美しいと云ふは

うではありませんが、丸顔の眼のぱつちりした、皮薄の頬の、眉と眉と  
の間の遠いやうな、いかにも愛らしく柔かなよい感じを與へました。小  
柄のせいかわかしくない、十九と云ふ年よりも……。

乙女の名は文江さんと云ひました。家は四谷の方の木線問屋で一人娘  
なさうでした。けれども一人の兄さんがありました。幼少の時から一緒  
には育ちましたが、實の兄妹ではありませんでした。ゆく〜は二人を  
結婚させると云ふ、親達の心ぐみなのでありました。

文江さんは第三高女に、兄なる青年は高商に通つて居りました。秀才  
でした。そしてまことに性質のすなほな優しい青年でした。親たちは生  
みの娘にも増して頼もしいものにしてゐました。文江さんは本當に幸福  
でした。

ところが兄さんは病氣になりました。人のいやがる肺病でした。早速鎌倉へ移されました。そして同じ病院に診療をうけに来つゝあつた鈴音をかいま見て、いつか烈しい懊惱に囚はれたのでした。

しかし青年は病人でした。しかも養子の身分でした。何にしたつて、「諦める」と云ふことより以外に、考へる方法もありません。あきらめてその土地を去つてしまひました。けれども諦め切れませんでした。胸が焼かれるやうでした。一人で熱海の方に行つてゐた間など、ただ鈴音の戀しさに悩み暮したやうなものでした。

逗子に葉山に茅ヶ崎に平塚に、青年は三年越し病みつづけて居りました。夏冬の休暇には文江さんもよく看護に來ました。青年は病氣以來一層氣が弱くなつて、涙のこぼれる程感傷的に優しかつたさうです。いち

らしいと云つて文江さんの母さまはよく泣きました。

秘めたる思ひをいよゝそれと文江さんに打ちあけたのは、亡くなる一ヶ月程前、どつと病勢が重つて、枕が上らなくなつてからださうでした。

文江さんは怨みはしませんでした。意外な事とも思ひませんでした。むしろその女の人が見たくなりました。そうして寂しい兄の胸中を察して、しみじみ悲しく聲を放つて泣きました。

それからはもう明けても暮れても、病人は文江さんを相手に鈴音の噂ばかりしつづけてゐたさうでした。それが何よりの心やりらうございしました。文江さんは自分までが苦しくなつて、せめて自分がその女を訪ねて見やうかと相談しました。が、病人は切にとめました。そして文江

さんにすまない〜と云ひつづけ乍ら、死にたくないと思え乍ら、終に二十四を一期として、茅ヶ崎の假寓で逝きました。

あれほどに思ひつめてゐたものゆるる。もし鈴音にあてた遺書でもありはしまいかと文江さんは遺物の整理をする時に額の裏、枕當の中まで注意しましたけれど、それらしいものも見あたらず、よく〜覺悟してゐたものと見え、長年書きためた日記などもすつかり仕末してありました。

文江さんがたど〜と面から手布を放さず話すこの長物語の間、鈴音は例の沈着な表情を微動だもさせず聞いてゐましたが、自分の様な面白味のない人間でも、それほどに思ひ込んでくれる人があるのかしら、とふと傷ましいやうな滑稽なやうな氣がして來ました。そして流石にその頃——見染められたと云ふ當時の、また肩揚の痕跡も失せ切らなかつた

筈の自分を思ふと、すこし面ぼてりも覺えました。と共にそんな病人の徒然な病床の空想のいゝ對象に散々されてゐたのだと、不快な氣持もしました。が、目の前に俯いて泣いてゐる文江さんのしほらしい様子を見ると、こんな女がありながら、とまた笑へなくなりました。

「兄と同じ御病氣で小笠原島へ轉地なすつて、すつかり御丈夫におんなすつた方がありますのよ。兄にも大變おすゝめ下すつたのですけれど、やつぱり兄は……」

ぱつと双頬に羞らひの色を見せ乍ら、

「貴女のお傍をそんなに遠く離れて了ふのが厭だつたのでございます。鈴音はちくりと胸が痛うござんした。」

「何處に居りましたも兄は、時々此地へ見にまゐつたさうでございます。」



の、そうしていつも御門に同じ標札がかゝつてゐるので、安心したと云つて居りました。貴女はよくお琴を弾いてらつしやいましたつて。』  
鈴音はだまつて火箸の先で、赤く熾つた櫻炭の切口を突ついて居りました。

「今更貴女にきいて頂いたつて……馬鹿な奴だと御さげすみも恥かしうございます。兄の本意でもありません、けれども私は……私は……どうしても我慢が出来なくなりました。あんまり兄が可哀想で……さうかと云つて貴女より外に……私、両親にだつてこんな事は申せませぬ……」

大粒の涙の玉を長い睫毛に貫き乍ら、文江さんは口邊の痙攣つたやうな笑ひ方をしました。そして兄さんは好きなひとだつたけれど、自分は

兄さんに對して戀はなかつた。兄さんもさうだつた。あんまり親み過ぎてゐたせいであらう。だのに兄さんは自分を憚つてあんな悲しい戀をした。私は私でこれから自分の戀を探します、それが亡くなつた人に對しても第一の追善であらうし、あれほどすまながつてゐた自責の念を少しでも輕めてやる事が出来るにちがひない故、と昂奮しきつた調子で云ひました。

鈴音はこの乙女が自暴でも起しかけてるのではあるまいかと氣づかはれましたが、さうでもなささうでした。その日は丁度青年の二七日にあたる日だつたさうでした。

兄の恥辱だからとて姓も住所も委しうは明かさず、そのくせ立ちともなげにもちくしてゐる乙女を、鈴音は出来るだけ優しく戀めて二三町

ある電車の停留所まで見送つてやりましたが、その乙女は肩のすれ合ふやうにして歩いて、もつと何か聞いて貰ひたさうでした。

あの乙女はどうしたことでせう、幸福な戀を見つけたでせうか。いまその事をしみじみと思ひ出しました。

婚約の女があつたばかりに、三年の間思ひつゞけ乍ら、自分には一言も洩らさずに逝つてしまつたひと。どんな人か鈴音は知りませんが——それを一度は男らしいと思ひ泌みたものゝ、今考へてみると本當に弱い、あまりにその人は弱かつた。眞實の戀なら何物にも打勝たなくてはならぬ。女の榮は靈も肉も抱容してくれるやうな、大きな力強い對手の生氣を躍動させるにある。

確乎たる自我の信念や凜とした男性美の缺けた男の戀は、砂上に立て

たパペルの塔みたいなものであります。朝日に榮ゆる尖頂の金の輝きに眩めてゐる内に、脚下の石は一つ／＼動き初めてることを本人は知らない。いくら男の建てた塔の中に安らかに穩かに住むやうにつくられた女だからつて、その塔の礎のゆるぐのを見ては、いやでもちつとしては居られません。うか／＼すれば共倒れになつてしまふ。

孝さんは今は全然惠美子さんの戀から冷めて、今度のもつと優しくつゝましい女をと求めてゐる。男が偉く頼母しくつて女が優しく溶け合ふ時にこそ、まことの戀は保證せられる。兩個相許すところに戀あるのが、自然の法則でありませうもの。

人生の春ですもの、若い人達は毎日詩を作る特權を持つてゐます。春を萌むも雨にあり、春を行るも雨にあり、雨こそ天地の生命を培ふ。若

い人達ひとたちに涙なみだあり、歡よろこびて泣なき悲かなしみて泣なき詩うたを作つくつて泣なく。泣ないて泣ないて泣なき明あかして、いつしかに各かく個この落おち着つくべき運うん命めいに到た達たつする。異い常じやうの昂こう奮ふんも異い常じやうの眩げん惑わくも、怒いかりも怨うらみも、惱なやみも、戀こいも、たいまゝならぬ涙なみだがまゝにする。寂さびしう覺さめた鈴すず音ねの心こころは今いまはひたすら、藝げい術じゆつの方ほうへくと傾かたむきを増ますばかり。きのふけふかたく門もん戸こを鎖さし客きやくを謝しゃして、專せん心しんに繪え筆ふでをなめてゐるさうであります。その大たい作さくがこの秋あきには何どこ處こかのサロンの一隅いづを飾かざるかも知しれませぬ。多た情じやう多た恨こんの鈴すず音ねの涙なみだで溶といた繪えの具ぐの香かが今いまから忍しのばれる。

その後ごどうなつた事ことやら、公きみ二にさん達たちの噂うはさもあれつきりに死のこつてゐます……。「をばり」

大正七年一月十九日印  
大正七年一月廿五日發

行 刷

定價金八拾五錢

不許複製

著 者 内藤千代子  
發行者 田中金一郎  
印刷者 田中 潔

發行所

京橋區長崎町二ノ九  
振替東京三三三三〇番

京橋堂出版部

發賣所

東京神田區淡路町一ノ一  
振替東京九〇七九番  
電話神田一三二番

泰山房

178  
1809

終

